

奈良市埋蔵文化財調査概要報告

昭和60年度

昭和62年

奈良市教育委員会

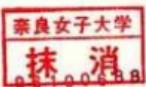
2000

-



奈良市埋蔵文化財調査概要報告

昭和60年度



序 文

平城京は、今から千二百有余年前、我国の都として現在の奈良市域を中心として栄えた国際都市であります。そして遙然とした「絹の道」を通じて、その周辺各地域の文化がこの奈良にもたらされたのです。往時の華かさは、正倉院宝物をはじめとする貴重な文化遺産からも窺うことができましょう。しかし、華やかなものだけが歴史ではありません。華やかな「文化」の影でそれを支えた数多くの庶民がいたことも忘れてはならないことでしょう。

奈良市が、本格的に平城京跡の発掘調査に携わるようになりますから、本年でようやく9年になります。その間に平城京跡調査も100次調査を超え、徐々にではありますが、平城京の様相を知るうえでの貴重な資料の蓄積がなされております。しかし、その反面で、数多くの遺跡が無秩序な開発により、消し去られていることも事実であります。

地下に埋もれてしまった重要な歴史遺産、これを明らかにし、後世の人々に伝え残していくことが、平城京跡という歴史的都市遺跡の上に生活する我々の大きな責務であります。そのためにも、今後とも一層積極的な保全対策の検討調査研究体制の充実に努力してまいる所存であります。

発掘調査及び、調査報告書作成にあたりまして、御指導、御協力賜りました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめ、関係諸機関の方々に厚く御礼申しあげます。

昭和61年12月

奈良市教育委員会

教育長 久保田 正一

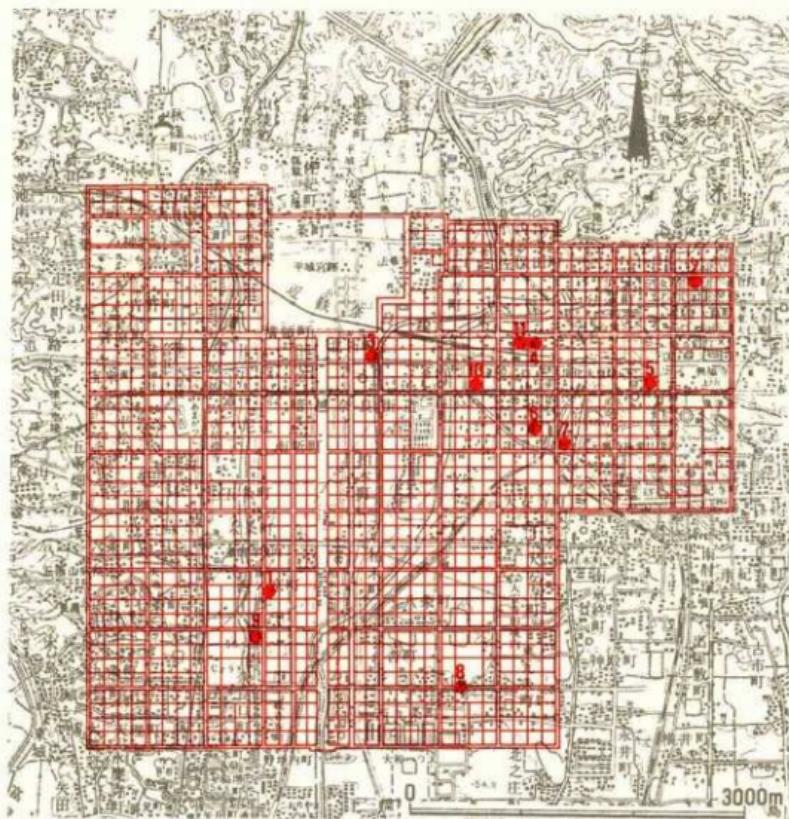
例　　言

1. 本書は、昭和60年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。
2. 昭和60年度には、のべ29件の発掘調査を実施した。本書では、そのうち発掘原因者の費用負担により実施した調査について報告する。
3. 本書に収録した報告は、次頁に記したとおりである。
4. 発掘調査は、奈良市教育委員会文化課埋蔵文化財調査センター（所長 三好良則（当時））が行なった。調査に関わる庶務は、文化課文化係（係長 野口宏、森光彦）が担当した。
5. 発掘調査および出土遺物の整理作業には、下記の諸氏の参加、協力があった。
相原嘉之、西 昌代、池永和子、大西明彦、大野佳子、河合純之、影近栄子、
桐山美佳、佐伯博光、佐賀和美、志賀理史、菅原道子、芹川順子、玉林尚子、
樋泉彰子、中山和之、服部芳人、花谷めぐむ、原田憲二郎、藤田忠彦、古川成美、
保坂香恵、松山徑子、松田光広、三上牧子、宮腰瑠璃子、村松京子、山下優貴子、山村光子、吉田洋恵、吉田野々
6. 本書の作成は、文化課長 亀井伸雄の指導のもとに調査担当者全員があたり、
それぞれ分担し執筆した。なお、各報告の末尾にその文責を明らかにした。
7. 本書編集は、立石堅志が行なった。

目 次

頁

1. 平城京右京七条一坊十五坪の調査 第97次	1
2. 平城京左京（外京）二条七坊八坪の調査 第96次	5
3. 平城京左京三条一坊十五坪の調査 第94次	6
4. 平城京左京三条四坊九坪の調査 第102次	8
5. 平城京左京（外京）三条六坊十二坪・円証寺旧境内の調査 第89次	13
6. 平城京左京四条四坊十一坪の調査 第99次	19
7. 平城京左京（外京）四条五坊四坪の調査 第88次	21
8. その他の調査	25



発掘調査位置図

調査地一覧

	調査地	調査期間	調査面積	備考
1	平城京右京七条一坊十五坪	六条町97-1番地 102-1番地	60年9月2日 ~10月30日	1,230 m ² 高比康臣
2	平城京左京(外京)二条七坊八坪	西包永町31番地 他	60年8月21日 ~9月13日	300 m ² 御口興不動産
3	平城京左京二条一坊十五坪	一条大路南二丁目135-1と3	60年8月8日 ~9月20日	450 m ² 木本 隆
4	平城京左京三条四坊九坪	芝辻2丁目171番地 他	60年12月10日 ~61年2月13日	1,000 m ² 御明城商事
5	平城京左京(外京)二条六坊十二坪内許寺旧境内	林小路町5-1番地	60年5月21日 ~8月1日	355 m ² 日本生命保険相互
6	平城京右京四条四坊十一坪	三条大宮町352・363番地	60年9月30日 ~12月7日	1,100 m ² 御富士土地所 御座双ホーム
7	平城京左京四条五坊四坪	三条本町259-1番地	60年5月17日 ~6月18日	282 m ² 御太平開発
8	平城京八条人路	東九条町430番地	60年1月20日 ~1月28日	150 m ² 奈良市農協
9	平城京右京八条二坊一坪	七条町字東浦170-1	60年5月27日 ~7月19日	480 m ² 御佐伯建設
10	平城京左京三条三坊十二坪	大宮町4丁目258-7	60年8月12日	18 m ² 御カヤノキ建設
11	平城京左京三条四坊八坪	芝辻町2丁目235-1	61年1月21日 ~1月31日	440 m ² 西田素康・西田辰
	大柳生遺物散布地	大柳生町2028番地 他	60年11月11日 ~12月20日	425 m ² 御場整備会
	平城京朱雀大路	柏木町	60年12月16日 ~61年2月1日	130 m ² 市道整備
	平城京右京六条一坊十四坪	西の京町104-1番地	60年7月8日 ~7月30日	120 m ² 宮城正治
	平城京右京七条二坊十四坪	七条町349番地	60年10月21日 ~12月9日	534 m ² 七条町地域体育館
	平城京左京(外京)四条六坊十一坪	南中町2・3番地	60年10月16日 ~10月22日	17.5 m ² 都市計画道路
	元興寺旧境内	北室町15番地の2 16番地の2 下御門町43番地の2	61年3月12日 ~3月28日	65 m ² 都市計画道路
	平城京左京六条三坊十五坪	大安寺町81-1番地	60年6月20日 ~7月24日	140 m ² 下水道集水場
	平城京左京六条三坊十六坪	大安寺町98番地の1・5	60年4月24日 ~5月17日	196 m ² 市川美喜雄 市川嘉雄
	平城京左京七条二坊六坪	八条町792の1番地 他	60年8月8日 ~9月1日	255 m ² 八条町駐車場
	平城京左京八条二坊一坪	杏町391の2番地	60年9月26日 ~10月9日	60 m ² 辰市保育園
	コナベ占境外拠点	法華寺町・佐紀町	60年7月28日 ~8月1日	27 m ² 上水道管布設
	史跡大安寺旧境内 (食堂并大眾院推定地)	大安寺町1035番地の1	60年4月5日 ~4月10日	30 m ² 野田忠一
同 (錢院推定地)	大安寺町東今在家994-2	60年5月1日 ~6月12日	47.5 m ² 山木五郎	
(同)	大安寺町1263	60年12月18日 ~12月21日	12 m ² 大西義則	
(同)	大安寺町1260-2	60年12月18日 ~12月21日	0.5 m ² 東 荣造	
佐紀町遺跡確認調査	佐紀町1264番地 他	60年1月27日 ~3月27日	626 m ²	
東市推定地(平城京左京八条三坊十・十一坪)	東九条町437・438番地	60年11月19日 ~61年3月19日	600 m ² 重要遺跡範囲確認	
平城京左京九条一坊三・六坪	西九条町5丁目4-9・11・12	61年1月17日 ~3月31日	600 m ² 御第一化工	

※ 掲載番号は、発掘調査位置図に対応する。

1. 平城京右京七条一坊十五坪の調査 第97次

I はじめに

本調査は、奈良市六条町97・102-1番地において、高比康臣氏届出の病院建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では右京七条一坊十五坪の西辺部のはば中央を占め、西端には西一坊大路東側溝の存在が想定される位置であった。調査は昭和60年9月2日に1230坪の発掘区を設定して開始し、その全日程を終えたのは同年10月30日であった。

II 検出遺構

調査地は休耕田で、厚さ15~30cmの耕作土を除去するとただちに地山が露出する。地山となるのは黄灰色もしくは灰褐色系の砂土で、この上面で西一坊大路東側溝、十五坪の西辺築地堀、掘立柱建物6棟、井戸4基などを検出したが、どの遺構とも浅く、上部はかなりの削平を受けている。大半の遺構の構築時期は奈良時代であるが、井戸3基が平安時代後半まで下る。

SD01 幅2.0~2.9m、深さ50cm内外の素掘り溝で、西一坊大路東側溝に相当する。溝内の埋土は3層に大別でき、下層に黒灰色粘砂、中層に茶褐色砂土、上層に灰褐色砂土が堆積する。いずれの層からも奈良時代の土器と瓦とが出土している。

SA02 SD01の東側で、これに沿って断続的に小柱穴が列なる箇所があり、これを添柱痕とみなして築地堀を想定した。梁行2.3mであるから、基底幅7尺と推定でき、SD01との心々間の距離は約3.6mである。

SA03 全長2間(3.9m)の南北廊で、SB08の廂と柱筋を備える。柱間1.95m等間。

SB04 行7間(15.4m)、梁行2間(5m)の東西棟建物。柱間は行2.2m等間、梁行2.5m等間である。柱掘形は一辺0.8~1.2mと比較的大きいが、深さは25~40cmを残す程度である。建物方位が北で東に振れている。

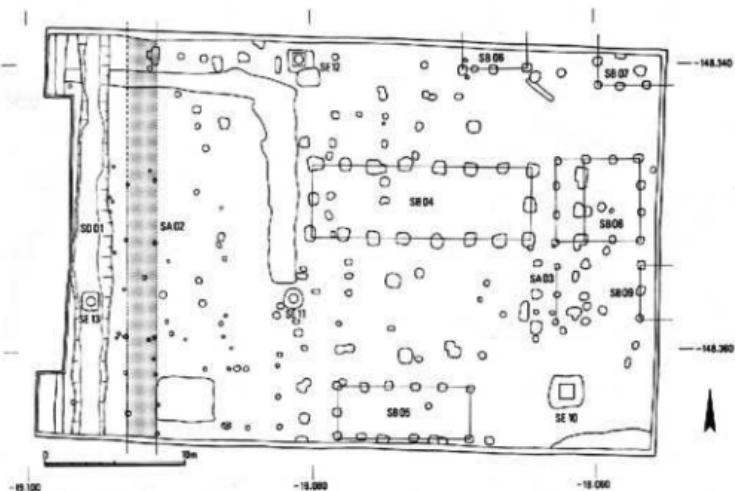
SB05 行5間(9.4m)、梁行2間(3.6m)の東西棟建物。柱間は行2間がほぼ1.9m等間、梁行が1.8m等間である。削平で東妻柱を欠く。建物方位が北で東に振れている。

SB06 東西2間(4.8m)の柱列で、南北棟建物の南妻柱列と考える。柱間1.8m等間。

SB07 行2間(3.4m)以上、梁行1間(1.8m)以上の東西棟建物。建物方位が北で東に振れている。

SB08 行3間(5.7m)、梁行3間(5.7m)の西附付南北棟建物。柱間は行、梁行ともに1.9m等間で、廂の出も同じく1.9mである。

SB09 南北2間(3.8m)の柱列で、東西棟建物の西妻柱列と考える。柱間1.9m等



遺構平面図 1/400

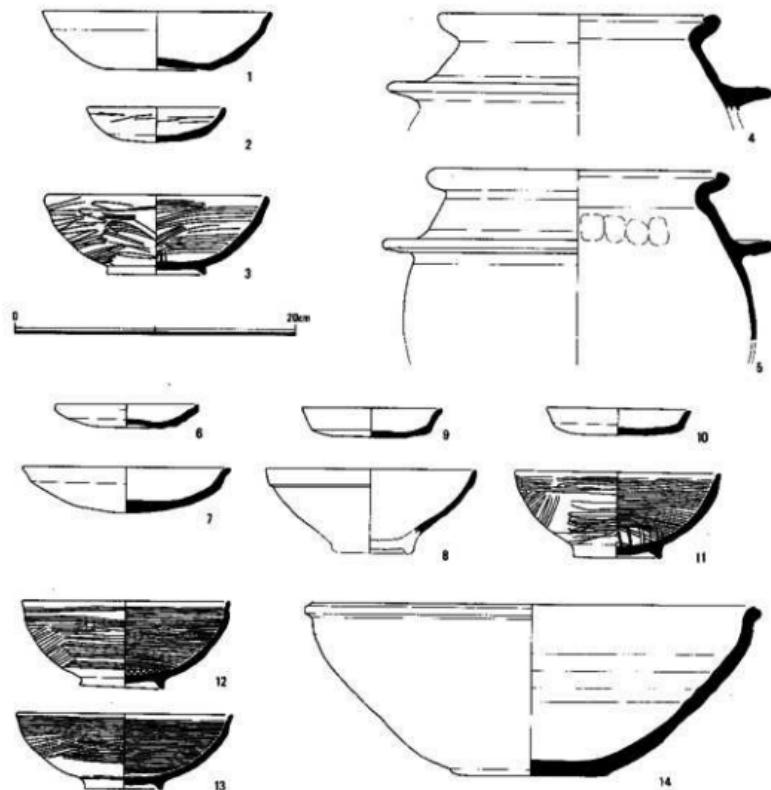
間で、SB08の東側柱列と柱筋を描えている。

SE10 東西2.5m、南北2.4mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ1.0m。井戸枠は相欠き納結合の方形横板組のもの（内法一辺118cm）で、2段分が残存した。枠内からは奈良時代中頃の土器、瓦が少量出土し、掘形からは重圓文軒丸瓦1点が出土した。

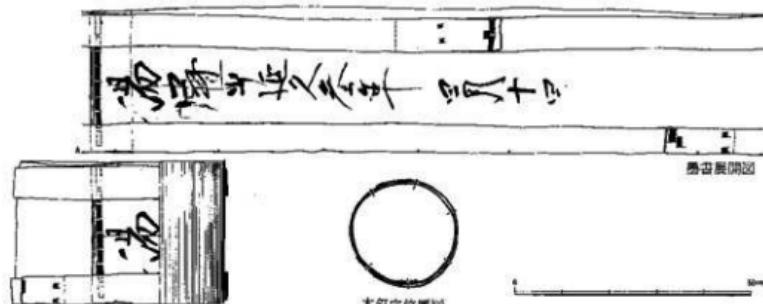
SE11 径1.2mの円形掘形をもつ井戸で、深さ0.95m。井戸枠には、最下段に曲物（径44.5cm、高さ30.5cm）を据え、これの上部に須恵器甕の口縁部（径56.5cm、高さ12.5cm）をのせ、その上にいまひとつの曲物（径63cm、高さ10cmまで残存）を置く。枠内からは11世紀末頃の土器が出土したが、奈良時代の軒丸瓦（平城宮6225型式）も混在した。なお、最下段曲物の側板外周には「湯屋□延久參年四月十日」の墨書があった。

SE12 東西1.85m、南北1.75mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ1.7m。井戸枠は方形堅板組のもの（内法一辺78cm）で、四隅に立てた円柱に納留めした横棟で各辺4～5枚の堅板を受ける構造である。横棟は最下段のみ、堅板は長さ75cmまでが残存した。さらに井戸底には水槽の曲物3個（下段：径41cm・高さ25cm、中段：径41cm・高さ32cm、上段：径48cm・高さ9cm）を据えている。枠内からは11世紀末頃の土器が出土した。

SE13 SD01埋没の後に掘られた井戸で、東西1.4m、南北1.3mの隅丸方形掘形をもち、深さ1.1m。井戸底に人頭大の石を敷き、この上に据えられた曲物2個（下段：径39cm・高さ27cm、上段：径42cm・高さ16cmまで残存）のみが残存した。枠内からは11世紀前半の土器が出土している。



SE11 (12~14)、SE12 (6~11)、SE13 (1~5) 出土器 1/4



SE11 墨書曲物 1/12

四 出土遺物

西一坊大路東側溝SD01、井戸SE10からは、奈良時代の須恵器、土師器が、また井戸SE11～13からは、11世紀の土器類が出土した。出土量は、いずれも少量である。ここでは、時期的にもまとまりをもった井戸SE11～13の出土土器について記す。

SE13 出土土器（1～5） 土師器皿（1）は、口縁上部を横ナデ調整によってやや外反させるもので、外面下半、底部は不調整、内面はナデ調整する。黒色土器B類皿（2）は、底部がやや丸みをもつ。口縁部外面はヘラ削り、内面は底部に平行方向のヘラ磨き、口縁部に横方向のヘラ磨きを施す。黒色土器B類碗（3）は底部内面に十字状のヘラ磨きを施し、口縁部内面には横方向のヘラ磨きを施す。外面は口縁部に5分割のヘラ磨きを施し、底部高台内にも平行方向のヘラ磨きを施す。土師器羽釜（4・5）はいずれも外反する口縁部をもち、口縁端部を内側へ折り曲げ肥厚させる。内外面ともナデ調整とする。胎土は砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。黒色土器B類碗は、法隆寺東室出土のものに比べ口径がやや大きいが類似し、土師器皿は、平城京左京六条三坊十三坪井戸SE15のものと共通する。瓦器碗出現の直前、11世紀前半にその時期が求められよう。

SE12 出土土器（6～11） 土師器皿（6・7）のうち、小皿の6は、口縁端部を折り曲げ肥厚させる。白磁碗（8）は中国製。口縁部に小さな玉縁をもち、胎土は灰白色、釉色はやや灰色を帯びる。体部外面下半は無釉。瓦器皿（9・10）は、口縁部内外面を横向方向のヘラ磨き、底部内面には斜格子状・平行状のヘラ磨きを施す。瓦器碗（11）は、外面に三分割のヘラ磨き、底部内面には斜格子状のヘラ磨きを施し、口縁部内面を密にヘラ磨きする。川越氏編年第1段階C型式に相当するものである。

SE11 出土土器（12～14） 瓦器碗（12・13）は、SE12出土のものに類似する。須恵器鉢（14）は、丸みをもって立ち上る体部と外側へ折れる口縁部をもつ。東播系の製品と考えられる。井戸棒に「延久参年」（1071年）銘の曲物が転用されており、曲物の使用期間、井戸の使用期間を考慮しても、これらの土器の年代は12世紀に下るとは考えられず、SE12出土土器とともに、墨書年銘に近い11世紀後半に求めておきたい。

SE11 墨書曲物 井戸SE11の井戸棒として使用されていたもの。上下2段に籠をめぐらす。下縁6箇所に木釘穴が残る。側板と籠は、檻皮で綴じ合わせられ、側板は1箇所1列8段、上段の籠は2箇所、2列前2段後1段と1列2段、下段の籠は2箇所、2列前1段後1段と1列2段の綴じ合わせがある。側板内面には平行する縦方向のケビキが約1cm間隔で施されている。側板外面に、以下の墨書きが施されている。

「湯屋口延久参年四月十日」

径44.5cm、高30.5cm、厚さ6mm

（I・II：中井 公、III：森下恵介、篠原豊一）

2. 平城京左京（外京）二条七坊八坪の調査 第96次

1. はじめに

本調査は、奈良市西包永町31他において実施した共同住宅建設に伴なう事前発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元では、左京（外京）二条七坊八坪の北寄りに相当し、一条南大路南側溝の存在が推定される。このため、一条南大路の確認を主目的として、東西10m、南北30mの発掘区（300 m²）を設定し調査を行った。現地での調査期間は、昭和60年8月21日から9月23日にかけてである。

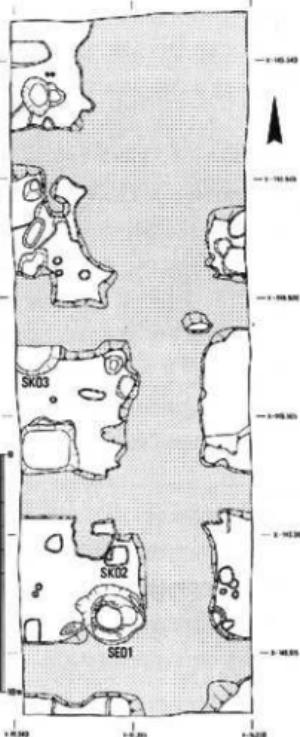
2. 検出遺構

発掘区内の基本的な層序は単純で、現地表土である40cm程度の淡茶灰色土の下は、ただちに地山の黄白色砂土となる。遺構は、この地山の上面で検出しがたが、調査以前に存在していた建物の基礎によって破壊されている部分が多く、遺構は部分的にしか遺存していなかった。検出した遺構は、鎌倉時代、室町時代の土塹数箇所と、室町時代の井戸1基である。また、一条南大路南側溝は検出できなかった。

SE01 発掘区の南寄り中央で検出した瓦積の井戸である。掘形は、円形（直径約1.5m）で、検出面からの深さ3mを測る。井戸棒は、基底部に河原石（15~20cm大）を円形に並べ、その上に平瓦の端面もしくは側面を内径1.0mの平面円形に描えて積みあげる。利用された瓦には奈良時代のものもあり、調査地に近い東大寺の廃棄された瓦を転用したものとみられる。埋土からは、14世紀末~15世紀初頭の土器類が出土した。

SK02 井戸SE01の北側で検出した土塙である。埋土から12世紀後半の瓦器碗・皿、土師器皿が出土した。

SK03 発掘区中央寄りで検出した土塙である。埋土から15世紀の土師器皿数点が出土した。



（森下恵介）

遺構平面図 1/240

3. 平城京左京三条一坊十五坪の調査 第94次

I はじめに この調査は、奈良市二条大路南二丁目135番地の1・3において実施した木本隆氏届出のレストラン建設に伴う事前発掘調査である。当該地は国道369号線（通称大宮通り）と国道24号線の交差点の西北部であり、平城京の条坊地割の復元では左京三条一坊十五坪の東南隅に相当する。調査は昭和60年8月8日から開始し、同年9月20日に終了した。このうち当初の6日間は試掘調査である。450 m²を発掘した。

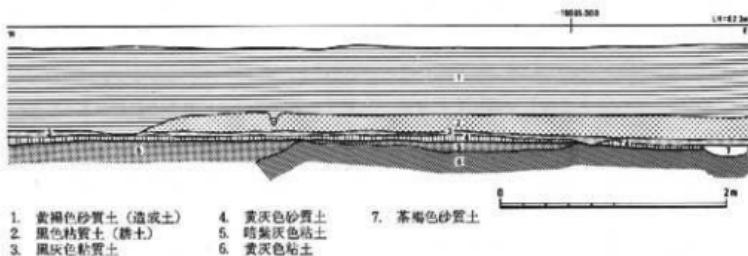
II 検出遺構 検出した遺構には、掘立柱建物3棟、溝1条、井戸2基がある。いずれも奈良時代のものである。以下、発掘区内の基本層序にふれたのち、各遺構の概要を記す。

土 層 調査地はすでに造成されており、地表面から60cmほどは造成時の土砂である。以下、黒色粘土層（耕土）、黒灰色粘質土層、奈良時代の遺物を包含する黄灰色砂質土とつづき、地表面下約80cmで地山である暗紫灰色粘土層に達する。ただし、発掘区のほぼ全域に奈良時代以前の流路があるため、黄灰色砂質土層以下はやや複雑な土層の堆積となっている。流路内には暗灰色粘土まじりの暗茶色砂、あるいは暗灰色砂が堆積し地山である黄灰色粘土層に至る。

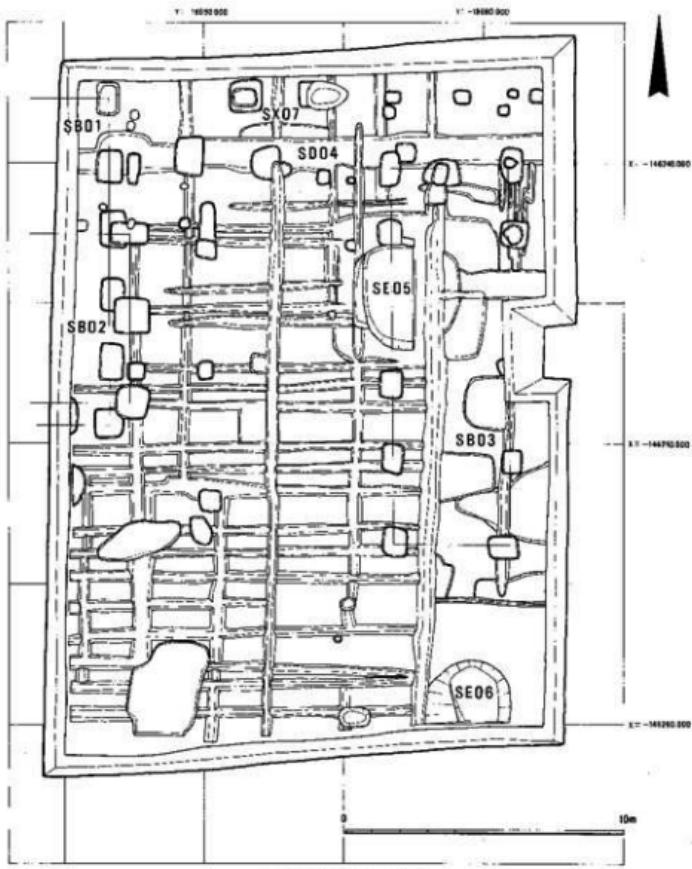
SB01 発掘区西端で検出した掘立柱南北棟建物。桁行5間（11.85m）、梁行不明。桁行の柱間は2.37m等間。柱穴の重複関係からSB02よりも古いことがわかる。

SB02 発掘区西端で検出した掘立柱東西棟建物。桁行不明、梁行2間（6.0m）。北妻柱列のみを検出した。この柱筋にあわせて身舎の北2.4mのところに小柱穴があるので、身舎北側に土塗があるいは縁のようなものがつくかもしれない。

SB03 発掘区中央東よりで検出した掘立柱南北棟建物。桁行5間（13.5m）、梁行2間（4.2m）。南妻柱列中央柱穴は検出できなかった。柱間は桁行が2.7m等間、北妻柱列は西から1.8m—2.4mである。重複関係からSE04より新しいことがわかる。



発掘区北壁土層図 1/150



遺構平面図 1/200

SD04 発掘区北半で検出した東西方向の溝。幅95cm前後、検出面からの深さは10cm程度。重複関係からSB01・03より新しいことがわかる。

SE05 SB03と重複して検出した井戸。一辺3.8m程度の隅丸方形の掘形をもち、検出面からの深さは2.4mである。井戸枠の痕跡はなく、遺物もほとんど出土しなかった。

SE06 発掘区南端で検出した井戸。径約3.05mほどのほぼ円形の掘形をもつ。検出面からの深さ約1.58m。井戸枠の痕跡はなく、遺物もほとんど出土しなかった。

SX07 発掘区北端で検出した2個の柱穴。柱掘形は一辺約1.2mと大きく、いずれにも柱抜取り痕跡がある。他にはこれと組合う柱穴はなく、その性格は不明。（西崎卓哉）

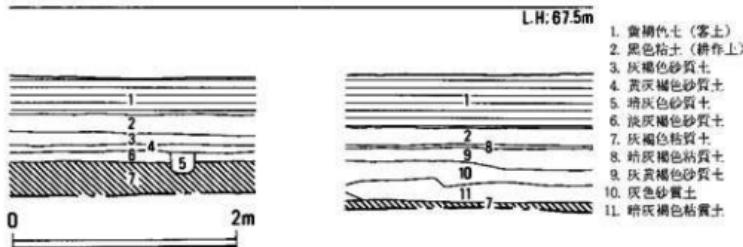
4. 平城京左京三条四坊九坪の調査 第102次

I はじめに この調査は奈良市大宮町五丁目278番地の1 輝明城商事代表取締役小松秀次氏届出のマンション建設に伴う事前発掘調査である。届出地は奈良市芝辻町二丁目171番地他、届出面積は2,971m²である。この地は平城京の条坊では左京二条四坊九坪の北半分に相当すると思われ、うち約1,000m²を発掘した。調査期間は昭和60年12月10日から昭和61年2月13日までである。

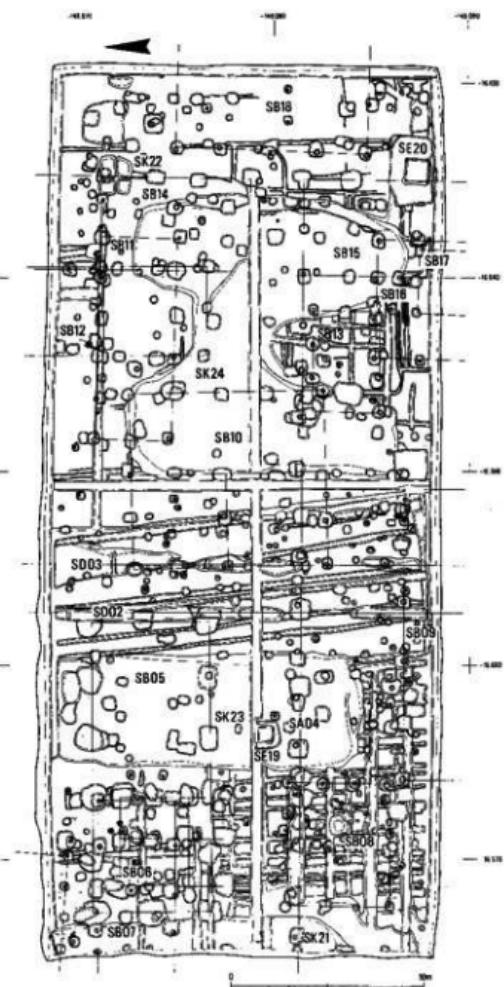
II 検出遺構 検出した遺構は坪内の小径、掘立柱建物16棟、塀1条、井戸2基、土壙である。これらの遺構は、その出土遺物と配置状況からみて奈良時代の構築物である。ほかに、古墳時代中期に埋まっていたと考えられる河川跡があり弥生時代から古墳時代の遺物若干が出土している。以下、まず層序を記したのち各遺構の概要を述べる。なお、建物遺構については、削平のため建物としてはまとまらない柱穴もあり、ここではまとまったもののみを報告する。

層序 現地表面から約30cmは造成時の客土である。以下、旧水田耕土、灰褐色砂質土、奈良時代の遺物を包含する黄灰褐色砂質土と続き地表面下約0.65mで地山である黄褐色粘質土に達する。発掘区中央付近でかつての水田の地割りに添って地山が西へ一段さがっており、発掘区西端の層序は、耕土以下、暗灰色粘質土、灰黃褐色砂質土、灰色砂質土、灰褐色粘質土、暗灰褐色砂質土と続き地表面下約1.1mで地山である黄褐色粘質土に達する。遺構は地山である黄褐色粘質土層上面で検出した。

SF01付SD02・03 発掘区西半で検出した南北方向の道路。坪内をさらに分割するための小径かと思われる。東・西に側溝をもつ。道路幅は溝心々で2.45m、約8尺ある。西側溝SD02は断面箱形で、幅60cm前後、検出面からの深さは30cm程度ある。東側溝SD03



発掘区南壁土層図 1/50



造構平面図 1/300

は断面U字状で、幅は60~80cmあるが、発掘区北壁近くでは大きく広がり 2.1 mほどにもなる。深さは45cm程度。SD02は1箇所 3.4 m、SD03は2箇所 3.1 mと 0.7 m途切れる部分がある。これが南・北それぞれの宅地への出入り口かと考えられる。ただ、いずれも門造構は検出できなかった。

SA04 発掘区中央で検出した東西方向の構。13間分（31.4m）を検出した。柱間はほぼ8尺等間。

SB05 発掘区西北部で検出した桁行5間（15m）、梁行2間（6m）の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行、梁行ともに10尺等間。柱掘形は一辺1.2m前後と大きい。重複関係からSF01よりは新しく、SB06・07よりも古いことがわかる。

SB06 発掘区西北部で検出した桁行3間（5.4m）、梁行2間（4.6m）の純柱建物。柱間は桁行が6尺等間、梁行は7.5尺等間である。重複関係からSB05よりは新しく、SB06よりも古いことがわかる。

SB07 発掘区西北部で検出した桁行3間（6.8m）以上、梁行2間（4.2m）の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が東から8・8-7尺、梁行は7尺等間。重複関係からSB05・06よりも新いことがわかる。

SB08 発掘区南西部で検出した桁行3間（6.3m）、梁行2間（3.3m）の掘立柱東西棟建物。身舎北側に扉がつく。柱間は桁行が10.5尺等間、梁行は6尺等間、扉の出は6尺。

SB09 発掘区南端で検出した桁行4間（12m）以上、梁行不明の掘立柱東西棟建物。桁行の柱間は10尺等間。重複関係からSF01よりも古いことがわかる。

SB10 発掘区中央で検出した桁行4間（10.2m）、梁行2間（4.8m）の掘立柱南北棟建物。身舎東側に扉がつく。柱間は桁行が8.5尺等間、梁行は8尺等間、扉の出は14尺。重複関係からSF01よりは新いことがわかる。

SB11 発掘区北東部で検出した桁行5間（10.5m）、梁行2間（3.8m）の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が7尺等間、梁行は6.5尺等間。重複関係からSB10よりも古いことがわかる。

SB12 発掘区北部で検出した桁行3間（7.2m）以上、梁行2間（4.8m）の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁行ともに8尺等間。

SB13 発掘区南東部で検出した桁行3間（5.4m）、梁行2間（3.3m）の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が6尺等間、梁行は5.5尺等間。重複関係からSB16よりは新しい。

SB14 発掘区北東部で検出した桁行4間（10.2m）以上、梁行2間（5.1m）の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁行ともに8.5尺等間。重複関係からSB12・SK22よりも古いことがわかる。

SB15 発掘区南東部で検出した桁行2間（5.1m）以上、梁行2間（5.1m）の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁行ともに8.5尺等間。東西とともに側柱筋をSB14とそろえる。重複関係からSE20よりも古いことがわかる。

SB16 発掘区南端で検出した桁行3間（6.3m）、梁行1間（2.1m）以上の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行、梁行ともに7尺等間。重複関係からSB13よりも古いことがわかる。

SB17 発掘区南端で検出した桁行不明、梁行2間（3.3m）の掘立柱南北棟建物。柱

間は5.5尺等間。

SB18 発掘区東端で検出した桁行4間(9.7m)、梁行1間(2.55m)以上の掘立柱南北棟物。柱間は桁行が8尺等間、梁行は8.5尺。

SE19 発掘区中央西寄りで検出した井戸。平面方形掘形のなかに縦板組の井戸枠をもつ。井戸枠は内法一辺80cm前後、検出面からの深さは1.42mある。四隅に柱をたて横桟をあてがったのち、その外側に幅15cm、厚さ5mm~1cmほどの板を一辺あたり9~10枚あてがう。横桟は納組をしておらず、2段分が残っていた。

SE20 発掘区南東端で検出した井戸。平面方形の掘形に縦板組の井戸枠を組む。井戸枠は内法1.05m前後、検出面からの深さは1.87mある。井戸枠は四隅に柱をたて、両端を削った横桟を納組みしたのち、その外側に幅15cm、厚さ2cmほどの板を一辺12~13枚づつあてるもの。横桟は一段のみが残っていた。それぞれの隅柱の下には径7~8cmほどの石を据えている。

SK21 発掘区西端で検出した土壙で、全体の規模は不明。

SK22 発掘区北東隅で検出した平面長方形の土壙。東西1.9m、南北1.6m、検出面からの深さは37cm。埋土には炭化物が多くまじっていた。

SK23 発掘区西半部で検出した土壙。東西約6m、南北16.2m以上、深さ30cm前後。重複関係のあるすべての遺構より新しいことはわかるが、その時期や性格は不明。

SK24 発掘区東半部で検出した土壙。東西に平面8の字型をしている。東西約14m、南北約14.2m、深さ35cm前後。SK23と同様の性格のものかと考えられる。

Ⅲまとめ 調査の結果、以上の遺構を検出した。ここでは道路SF01について検討する。道路SF01が坪の東西方向のどの位置にあたるかを検討するにあたり、その前提条件として、井上和氏の所論にしたがい京の条坊の骨格は大体で造営されたと考える。そして、条坊の東西方向の振れは平城宮南面大垣の振れの平均 W0° 05' 30" N とし、南北方向の振れは朱雀大路の振れの平均 N0° 15' 41" W として換算する。

まず、九坪の西を限る東四坊坊間路の位置を推定復元してみよう。東四坊坊間路は左京四条四坊九坪の調査⁽¹⁾で確認されており、その中心軸の座標値はX=-146,606.500 Y=-16,725.500とされている。これを、振れを勘案して北へ延長するとその座標値はX=-146,082.48 Y=-16,727.891となる。SF01心の座標値はX=-146,082.48 Y=-16,656.13であるから、東四坊坊間路心とSF01心との距離は修正値で71.760mとなる。

ところで、道路SF01が遺構の重複関係から見て、平城遷都当初から設定されていたものではないことは明らかである。とすれば、度地尺としての令大尺の使用が禁止された和銅6年(713)以降に造営された可能性が高く、その規格は令小尺で考えなければならないことになる。しかし、四坊坊間路と九坪の東を限る小路の幅とその心々間距離は遷都当

初に設定されていたはずであるから大尺で考えなければならない。そこでまず、四坊坊間路の2分1幅を減じてみる。左京四条四坊九坪の調査報告書は道路幅を溝心々で9mとしているので、この値を折半してさきに求めた71.761mから減じると67.261mとなる。そしてこの値を小尺(0.296m)に換算すると227.233尺となる。

つぎに、いま仮に九坪の東を限る小路の幅を20大尺⁽¹⁾と考えると、375大尺-20大尺÷2-4.5(m)÷0.3552(m)=352.3大尺となり、これが溝心々の九坪の東西幅となる。ここで、この値を小尺に換算してみると422.76尺となり、その半ば211.38尺とさきに求めた四坊坊間路心からSF01までの距離227.233尺とを比較すると15.853尺の差がある。つまり、道路SF01心は溝心々での九坪の中軸にはなく、約16尺東へよっていることになる。

さらにこれを別の資料から検討してみよう。この九坪と同じ左京三条四坊のうち七坪では坪を東西に二分する位置にあるとも考えられる南北溝を検出している。⁽²⁾そこで、この溝の中軸線を北へ延長しSF01の位置と比較してみよう。この場合もさきの前提条件と同じとすると、条坊の振れを勘案して七坪のSD1892心と今回のSF01心との東西距離は138.189mとなる。坪の東西幅は道路心々で375大尺、133.2mあると考えられるから、これの二分の一-66.6mに四坊坊間路の側溝心々幅の半ば4.5mを加えたものを、さきにもとめた138.189mから減じた値67.089m、226.7尺が、四坊坊間路東側溝心からSF01心までの距離となる。さきに求めた溝心々の距離は352.3大尺、小尺では422.76尺であったから、その二分の一、211.38尺と比較するとSF01心は15.32尺、溝心々の中軸より東へよっていることになる。

このように、どちらの資料で見ても道路SF01は九坪の溝心々の中軸より15~16尺東へよっていることがわかる。しかし、いずれも実際には検出していない条坊道路を推定しての検討であり、ここではその可能性を指摘するにとどめておく。

つぎに、SF01の東・西の側溝の切目、南・北それぞれの宅地への入り口の位置を検討しておこう。これも前提条件を上記と同じとする。九坪と同じ左京三条四坊の七坪では坪の南北中軸線上にあると考えられる小径SF1890が検出されており、SF1890心と今回のSF01の東・西両側溝の切日の中心との南北距離を求める、修正距離で129.890mとなる。SF1890は坪の中軸を通っているのだから375大尺÷2+10大尺=197.5大尺が九坪の南を限る小路の北側溝までの距離である。そして、さきに求めた129.890mを大尺に換算しての値を減じた168.181大尺が九坪の南を限る小路の北側溝心からSF01の側溝の切目の途中までの距離となる。ところが、この距離は坪を南北に2等分、あるいは3、4等分した場合のどの宅地の中心にも位置しない。これは条坊道路心々、溝心々どちらで考えても同様である。

(西崎卓哉)

(1) 井上和人「古代都城制地溝両考」『研究論集VII』奈良國立文化財研究所学報(第41冊)1984年10月20日

(2) 奈良國立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983年3月31日

(3) 奈良國立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980年3月31日

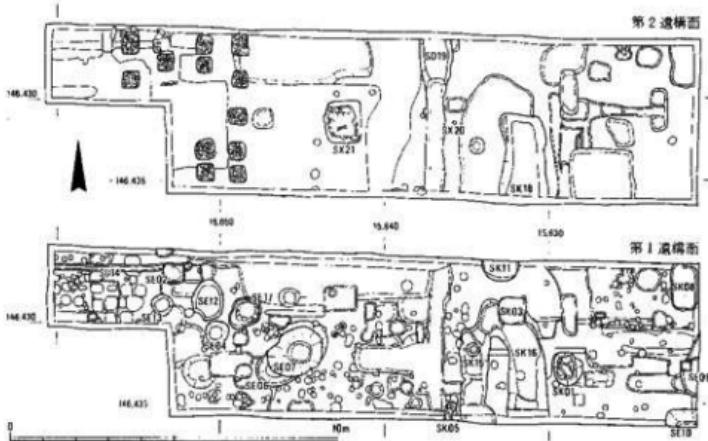
5. 平城京左京(外京)三条六坊十三坪・ 円証寺旧境内の調査 第89次

I はじめに 本調査は、事務所ビル建設とともに事前発掘調査として実施したものである。調査地は平城京(条坊復元では、左京(外京)三条六坊十二坪にあたる。また、当該地は中近世において「奈良町」と称された地域であり、室町時代創建と伝えられる真言律宗円証寺の旧境内地にあたる。円証寺は、筒井順昭の別業をその死後菩提所とした寺院で境内には室町時代末期様式をとどめる本堂と、地輪部に「順昭榮昇房 天文十九年庚戌廿日」の陰刻銘のある石造五輪塔があったことが知られている。なお、同寺は昭和59年に周辺の環境悪化を理由に生駒市上町へ移転、本堂を創建当時の姿に復元修理している。
(注)

調査は、奈良時代における当坪内の様相とともに、中近世寺院境内の様相を明らかにすることを目的に実施し、円証寺本堂の旧位置を含め総面積 335 m²での発掘区を設定した。調査期間は昭和60年5月21日から8月1日にかけてである。

II 検出遺構 調査地は、北東から南西にむけての緩やかな傾斜地にあたり、地山は南西に向かい徐々に下降する。発掘区内では基本的に三時期の遺構面が認められた。第1面は、現地表下約70cmでみられる黄色砂礫の地山面での古代～中世期にかけてのものであり第2面は、現地表下約50cmでみられる淡茶灰色砂質土の整地土上面での近世から近代期にかけてのものである。更に、現地表下約20cmでみられる暗茶灰色上の整地土上では、第3

注) 奈良県教育委員会『重要文化財 円証寺本堂・五輪塔修理工事報告書』 昭和60年

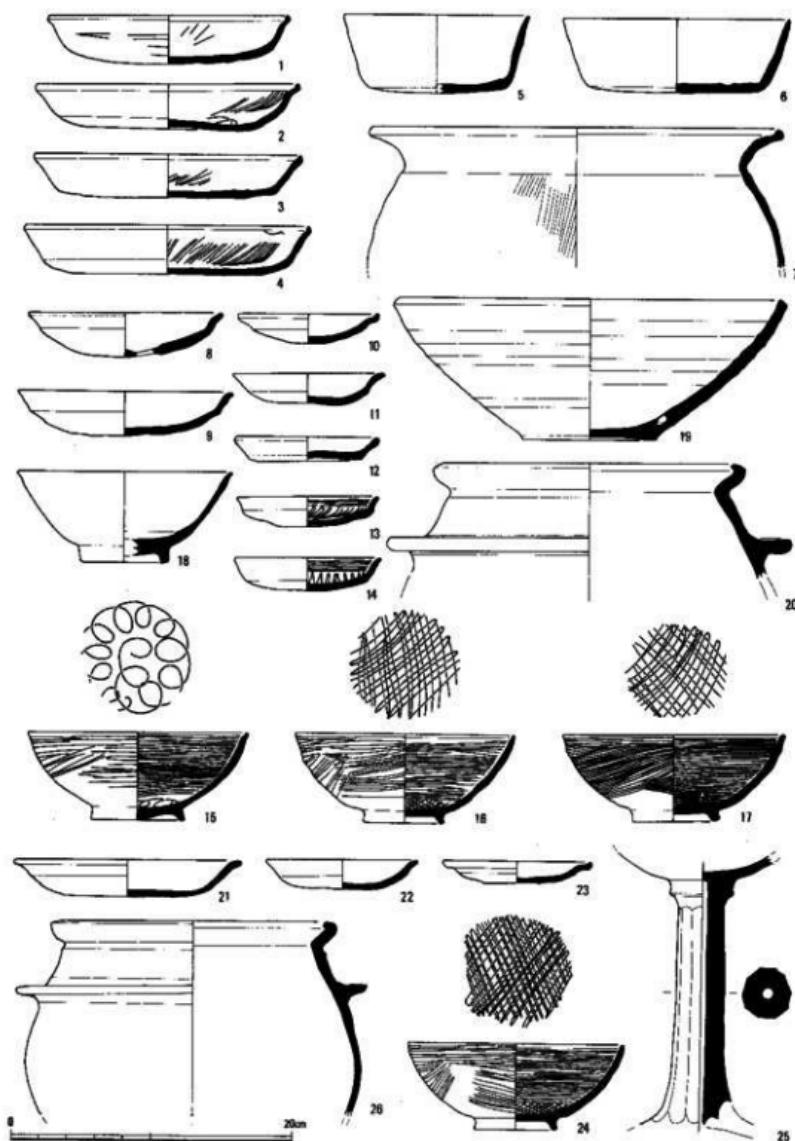


遺構平面図

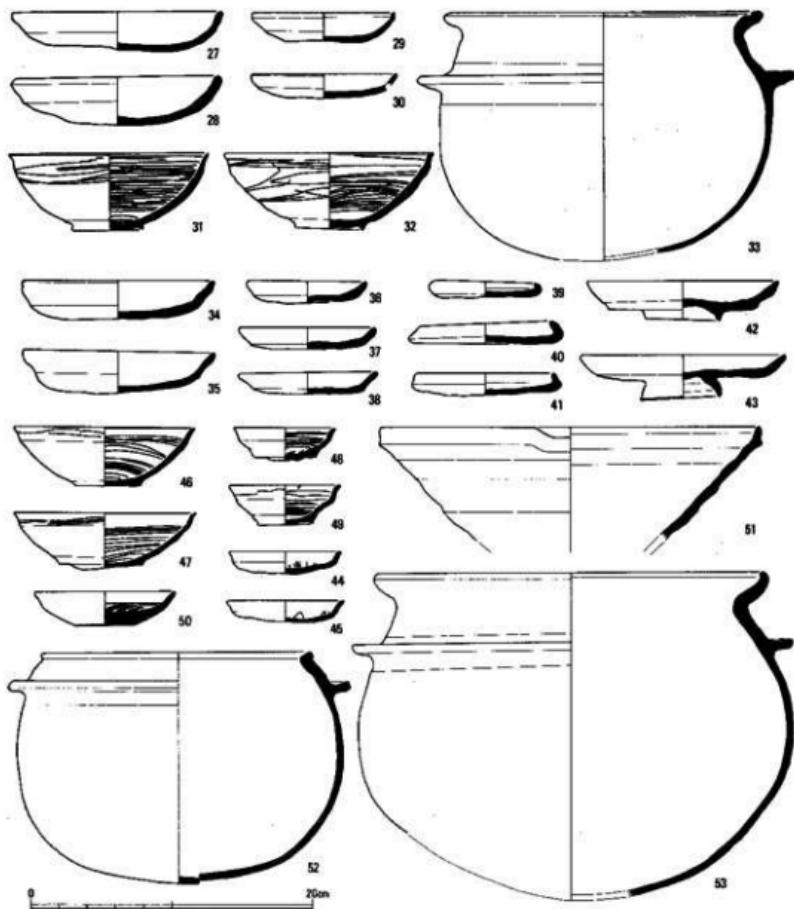
而、近代の遺構面の存在が確認できた。

第1遺構面 第1面の地山上面では、柱穴多数、井戸8基、土壙、溝を検出した。このうち、石組井戸SE17と土壙SK15・16は、おそらく上層遺構面で構築されたと思われる。土壙SK01は検出遺構の内唯一奈良時代の遺物が出上した土壙である。長辺1.2m、短辺1m程度の隅丸長方形の土壙で、土壙内には1m程度の巨石が数個投げ込まれている。井戸SD02は、発掘区西側で検出した一辺約1.4mの方形井戸で、掘形中央に直径0.6mの曲物を据える。曲物は腐朽が著しく、ほとんど原形をとどめない。曲物内埋土から10世紀前半の黒色土器が出土。土壙SD03は発掘区中央東寄りで検出した一辺1.5mの方形土壙で、検出面からの深さ1.7m。壁面は垂直に掘り込まれており、底は平坦となる。南壁をSK16により壊されている。埋土からは、11世紀後半代の土器類が整理箱に50箱以上出土した。井戸SE04は発掘区西部で検出した直径1.5mの円形井戸。壁面には垂直に掘り込まれる。検出面からの深さ2.2mまでを確認したが、更に深く、危険なため掘り下げるは断念した。埋土からは11世紀後半の土器類が出土した。土壙SK05は発掘区中央南壁にかかって検出した土壙。埋土からは12世紀中葉頃の土器類が出土した。井戸SE06は発掘区西部で検出した直径約2mの円形に復元できる掘形をもつ井戸。検出面からの深さ約4.3mを測る。埋土からは12世紀後半～13世紀前半代の土器類が出土。井戸SE07はSE06の北東部に重複して作り替えられたもので、SE06の壁を掘り込み、黄色粘土を用いて壁面を作り替えている。長辺約3m短辺約2.5mのやや変形した隅丸長方形の掘形をもつ。検出面からの深さ3.9mを測る。埋土から13世紀前半代の土器類が出土。遺構埋土の上層堆積に多量の土器包含層がみられた。土壙SK15はSK16の底部で検出した長辺3m、短辺1.2mを測る土壙。検出面からの深さ0.5mを測る。この土壙底でさらに、直徑0.6mの円形掘形に掘えられた瓦器甕を検出した。甕は底部が打ち欠かれており、砂層地山へ水が浸み込む様に囲ってあるものと思われ、SK15・16と関連した生活排水施設の可能性も考えられよう。

第2遺構面 第2面の淡茶灰色砂質土の整地上上面では、土壙数基と溝を検出した。この面では各所に地山の凹凸を覆う整地が厚く何時期かにわたって行なわれている。発掘区西側で礎石根石を検出したが、これは昭和33年移築時の本堂礎石根石である。土壙SK18はSK16に重複する土壙でSK16埋没後に作られたもの。埋土から18世紀前半代の土器類が出土。SK16との時期差はあまりないものと考えられる。溝SD19は幅約1.2m、深さ約0.7mを測る南北方向の素掘り溝。19世紀代の土器類が出土。生活排水の為の溝かと思われる。SX20は径約20cmの小土壙に土師器焼成を据え、蓋として同じく土師器焼成を重ねたものの。地鎮等の性格も考えられる。SX21は一辺約2mの方形区画で整地上を掘り込み黄色粘土で壁及び底を固めた池状のもの。上面周縁に幅約20cm程度の平坦面を作る。深さ約20cmで、底を平坦とする。壁面に沿って人頭大の列石を巡らせる。遺物は出土しなかった。



SK01 • SK03 • SE04 山土上器 1/4

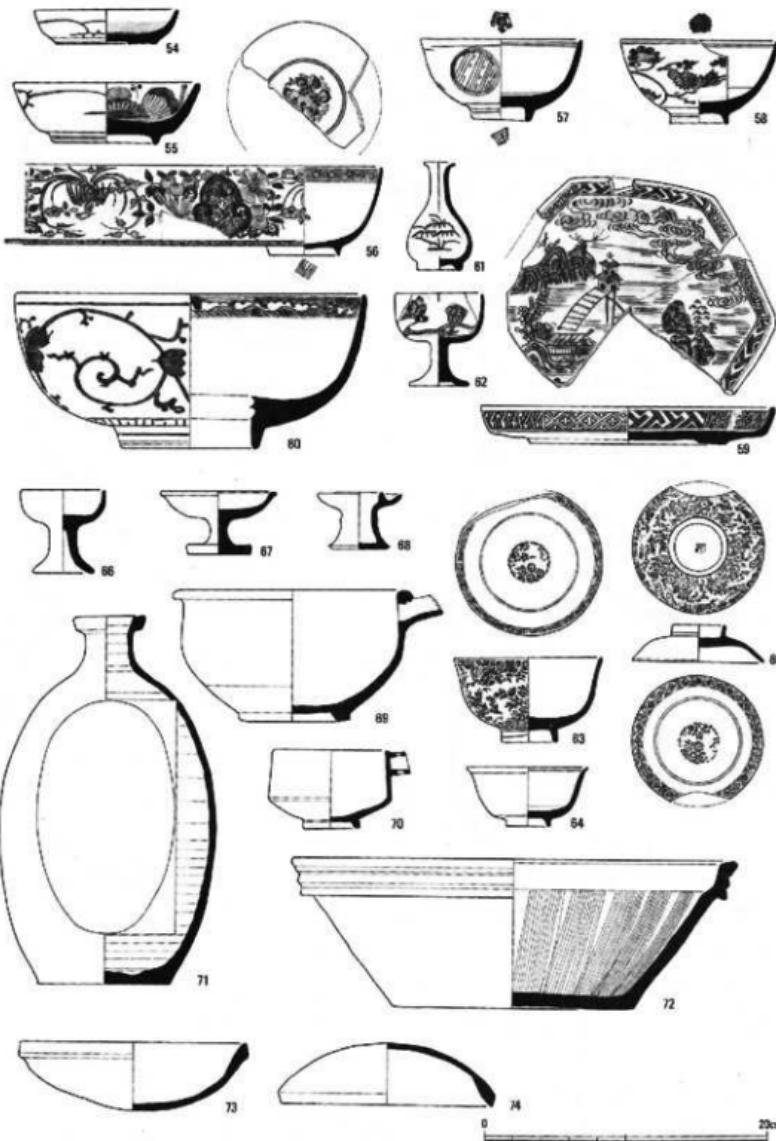


SK05・SE07 出土土器 1/4

III 出土遺物 各遺構から、奈良時代から近代にわたる時期の土器、瓦塊、木製品、金属製品等の多量の遺物が出土している。ここではそのうちの出土土器について記述する。

SK01 出土土器（1～7） 土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯A等がある。平城宮土器Ⅲに相当する時期のものであろう。

SK03 出土土器（8～20） 土師器皿・釜、瓦器椀・皿、須恵器鉢、白磁椀等がある。土師器皿には径14～15cmの大皿と径10～11cmの小皿とがある。大皿には底部に穿孔のみら



SK18 · SD19 · SX20 出土土器 1/4

れるもの（8）が何点かある。小皿には底部を糸切りとした特異なもの（12）が数点みられる。瓦器椀は底部見込み暗文が格子状のもの（16・17）と、螺旋状を呈すもの（15）がある。須恵器鉢（19）は東播系神出窯の製品であろう。おそらくは片口をもつ。いずれも11世紀後半代の特徴を示すものである。

SE04 出土土器（21~26） 土師器皿・高杯・釜、瓦器椀等がある。土師器皿には径16cm程度の大皿と、径10.5~11cmの小皿とがある。瓦器椀は見込み暗文を格子状とする。いずれも11世紀後半代の特徴を示すが、SK03出土土器よりやや古様を示す。

SK05 出土土器（27~33） 土師器皿・釜、瓦器椀等がある。土師器皿には径15cm程度の大皿と、径10~10.5cm程度の小皿がある。瓦器椀は見込み暗文を簡単な螺旋状とする。いずれも12世紀後半代の特徴を示す。

SE07 出土土器（34~53） 土師器皿・高台付皿・釜、瓦器皿・小椀・椀、須恵器鉢、青磁皿等がある。土師器皿には径14cm程度の大皿と、径9~10cmの小皿が見られる。また、口縁部を内側へ折り込むもの（39~41）や、高台を付するもの（42・43）も若干量見られる。瓦器椀は、見込み暗文を渦巻き状とするもの。小椀は径7~8cm程度のもので、見込みの暗文は平行状に施している。須恵器鉢（51）は東播系魚住窯の製品。片口を付す。いずれも13世紀後半代の特徴を示す。

SK18 出土土器（54~59） 磁器皿・椀・鉢・花瓶・仏飯器、陶器擂鉢、土師器皿・鍋などがあり。磁器はいずれも伊万里系の染付である。57にみられる染付椀は同一文様、同一形態の椀が数十点同時に出土しており、まとまった数量での使用が窺える。56は色絵。

SD19 出土土器（66~72） 磁器椀・皿、陶器擂鉢・鍋・行平・炮塔・徳利などがある。磁器椀・蓋（63・65）は型紙刷りによるもの。徳利（71）は胴部に楕円形の無軸部分をつくり、墨書きにより「[良町角振] 南都しまや 鳥田[]」と記す。他にも同様の無軸部分をもつ徳利が多数出土しており、販売店の屋号等を記したものであろう。

SX20 出土土器（73・74） 土師器炮塔で73を身に74を蓋として使用していた。

IV まとめ ここでは今回大量に出土した土器について概観する。時期的にみると、土器類には11世紀後半代から13世紀代にかけてのもの、17世紀から18世紀のもの、そして19世紀から近代にかけてのものが多くみられる。量的にはやはり19世紀から近代にかけてのものが圧倒的に多く、そのなかでも信楽系陶器の日常雑器に占める割合は非常に大きい。この事象は、他の奈良町遺跡においても同様にみられ、近在窯である信楽窯の18世紀から19世紀にかけての生産拡大に大きく影響を受けているものと考えられる。ところで、今回は14世紀から17世紀にかけて、すなわち円暈寺創建から江戸時代までの遺物は出土せず、その間の当地の状況は明らかではない。筒井氏菩提所としてのみ利用され、生活の場とされることとなかったのであろうか。興味深い事象を示していると言えよう。（立石堅志）

6. 平城京左京四条四坊十一坪の調査 第99次

はじめに 本調査は、奈良市三条大宮町352、353番地において実施した御富士地所・神産双ホーム届出のマンション建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元によると左京四条四坊十一坪の西半部に相当する。左京四条四坊は太安萬侶の居住地と考えられているところである。調査は、敷地の西端部に想定される六坪と十一坪の坪境小路東側溝の確認及び坪内の様相を知ることを目的として、面積約1100m²の発掘区を設定して行った。調査期間は、昭和60年9月30日から同年12月7日までである。

検出遺構 発掘区内の基本的な堆積土層状態は、盛土が0.6mの厚さで堆積し、これを除去すると旧耕土、床土、奈良時代の遺物を包含した灰色粘土が続き、地表面から約1.2mで黄褐色粘質土の地山へと至る。大半の遺構は地山上面から掘り込まれているが、部分的に整地土が残っており、この面から掘り込まれているものもある。検出した遺構には、溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土壙がある。

溝は東西溝2条を検出した。SD01は幅約1.8m、東に行くに従って広がり幅3.5mとなる。検出面からの深さ0.5mを測る。SD02は幅約2.5m、検出面からの深さ0.6mを測る。いずれの溝にも奈良時代前半の土器を包含した赤褐色土が堆積していた。SD01とSD02の溝々間距離(4.0m)の中心は、十一坪を南北に等分する東西ラインとほぼ一致しており、両溝間に坪内道路あるいは坪を分割する何らかの施設を想定することもできる。

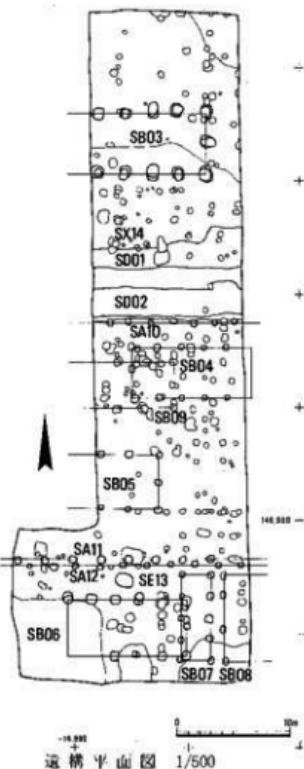
掘立柱建物は7棟を検出した。SB03は桁行4間以上、梁行2間の東西棟。柱間寸法は桁行、梁行ともに3.0m等間である。いずれの柱穴も柱を抜きとった跡がみられる。発掘区北端で検出した古墳時代の遺物を包含する自然流路を黄褐色粘質土で埋め立てたのちにSB03が建てられている。SB04は桁行5間、梁行2間の東西棟。柱間は桁行2.2m、梁行2.3m等間である。柱掘形は一辺0.3mと小さい。SB05は桁行2間、梁行2間以上の東西棟。柱間寸法は、桁行、梁行ともに2.5m等間である。柱掘形の深さは検出面から約0.15mと浅い。SB06は桁行5間、梁行2間の東西棟。柱間寸法は、桁行2.0～2.3mと不揃いで、梁行は2.3m等間である。柱穴は、一辺0.7m程度の方形掘形をもち、4柱穴には柱根が残存していた。建物の南西隅は、現代の池により壊されていた。SB07は桁行3間、梁行1間の南北棟。柱間寸法は桁行1.9m等間、梁行2.6mである。重複関係からSB06よりも古いことがわかる。SB08は桁行1間以上、梁行2間の東西棟。柱間寸法は、梁行が2.7m等間である。SB09は、桁行3間、梁行2間の東西棟。柱間寸法は、桁行2.4m、梁行2.1m等間である。柱掘形は不整形なものが多い。SB03からSB09までの建物の主軸は、いずれも 国土方眼方位と一致している。

掘立柱塙は3条を検出した。SA10はSD02に沿って連なる東西塙。7間分(10.8m)を検出した。柱間寸法は、1.7~2.0mとやや不揃いである。SA11はSA10とほぼ同位置にある東西塙。8間分(18.8m)を検出した。SA12はSA11と並行する位置にある東西塙。9間分(18.4m)を検出した。SA11・12は、計算上では、十一坪と十二坪の坪境小路心から北へ約42mのところに位置している。この数値は坪を南北に三等分した東西ラインにはほぼ等しく、これらの施設は坪の分割を意識してつくられたものと想定することもできよう。

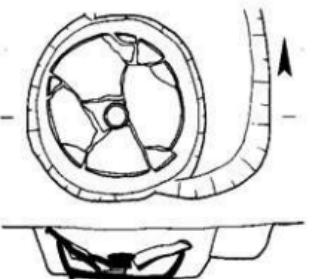
井戸は1基を検出した。SE13は東西1.5m、南北1.2mの平面隅丸方形の掘形を呈し、検出面からの深さ0.7mを測る。井戸枠は抜きとられたらしく、残存しない。井戸底からは奈良時代中頃から後半にかけての土器が小量出土した。

土壤は数基を検出したが、ここでは奈良時代の須恵器が埋納されていたものだけをとりあげて記すことにする。SX14は、SD01の北側縁辺で検出した。東西0.2m、南北0.2mの平面円形を呈し、検出面からの深さ0.1mを測る。須恵器杯Bに杯B蓋を重ねた状態で出土した。杯内には和銅閉賣が2枚かさねて納められていた。須恵器杯B蓋の頂部外面にはラセン状の墨線が描かれていた。

出土遺物 出土遺物には、古墳時代の土器類、奈良時代の瓦類および土器類などがあるが、その量は極めて少ない。奈良時代の土器類は、中頃から後半にかけてのものがめだつ。この他に帶金具1点がある。(三好美穂)



遠景平面図 1/500



SX14 平面・立面図

7. 平城京（外京）四条五坊四坪の調査 第88次

I はじめに

本調査は、奈良市三条本町 259-1 番地において、太平開発株式会社届出のホテル建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京（外京）四条五坊四坪の南辺部のほぼ中央にあたり、南端には四条大路北側溝の存在が想定されるところであった。調査地は休耕田であったが、一部造成が先行したために発掘区の設定に制約があり 282 m²を発掘したにとどまった。調査期間は昭和60年5月17日から同年6月18日までの33日間である。

II 検出遺構

発掘区内の土層は、耕作上の下灰褐色砂土の堆積が一層あり、地表下30~45cmで黄褐色粘土の地山となる。遺構はこの地山上面で検出し、奈良時代の掘立柱建物 9棟と井戸 1基に加え、弥生時代から古墳時代にかけての流路 2条がある。当初、発掘区南端に想定した四条大路北側溝については検出に至らず、わずかに発掘区外南側になるものと判断できる。

SD01 発掘区の北半を北東から南西に流れる自然流路。北岸が発掘区外となるため全幅は不明だが、南岸から11m分を確認した。この範囲での深さは約1mである。流路内には下層に厚さ25~35cmの黒灰色粘土の堆積があり、上層は灰色系の砂と粘土との互層である。主として上層から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が比較的良好な状態で出土している。

SD02 発掘区の中央を南東から北西に流れる自然流路で、西端でSD01と合流する。幅1.3~3.6mで、深さ0.2m前後と浅い。流路内には灰褐色粗砂が堆積し、弥生時代から古墳時代にかけての土器が少量出土した。

SB03 衍行3間（5.4m）、梁行2間（3.6m）の南北棟建物。柱間は衍行、梁行ともに1.8m等間である。重複関係からSB04、05、08、よりも古いことがわかる。建物方位が北で東に振れている。

SB04 衍行3間（5.6m）以上、梁行2間（4.6m）の東西棟建物。柱間は衍行北側柱列が東から1.8~2.0~1.8m、南側柱列が同2.0~1.8~1.8mで、衍梁2.3m等間である。5柱穴に柱根が残存し、重複関係からはSB03よりは新しく、SB05よりも古いことがわかる。

SB05 衍行3間（4.8m）、梁行2間（3.0m）の南北棟建物。柱間は衍行東側柱列が北から1.4~1.8~1.6m、西側柱列が1.6m等間で、梁行1.5m等間である。重複関係からSB03、04よりは新しく、SB08よりも古いことがわかる。建物方位が北で東に振れている。

SB06 東西3間（5.6m）の柱列で、東西棟建物の南側柱列と考える。柱間は東から

2.0—1.8—1.8 mである。

SB07 東西2間(3.6m)の柱列で、南北棟建物の南妻柱列と考える。柱間は1.8m等間である。

SB08 桁行2間(3.4m)以上、梁行1間(1.6m)以上の南北棟建物。柱穴が小さく、恐らくは3間×2間規模であろう。桁行柱間は南から1.8—1.6mである。重複関係からSB03、05よりは新しいことがわかる。建物方位が北で東に振れている。

SB09 南北2間(5.2m)の柱列で、東西棟建物の東妻柱列と考える。柱間は2.6m等間である。妻柱には柱根が遺存し、重複関係からはSB04、10よりも古いことがわかる。

SB10 後の搅乱で南妻柱列を欠くが、桁行3間、梁行1間(1.8m)以上の南北棟建物に復元できる。確認し得た桁行2間分の柱間

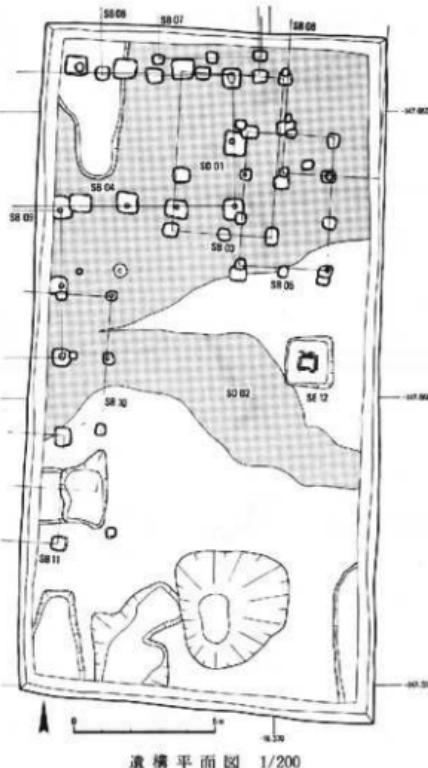
は北から2.2—2.4mである。重複関係からSB09よりは新しいことがわかる。建物方位が北で東に振れている。

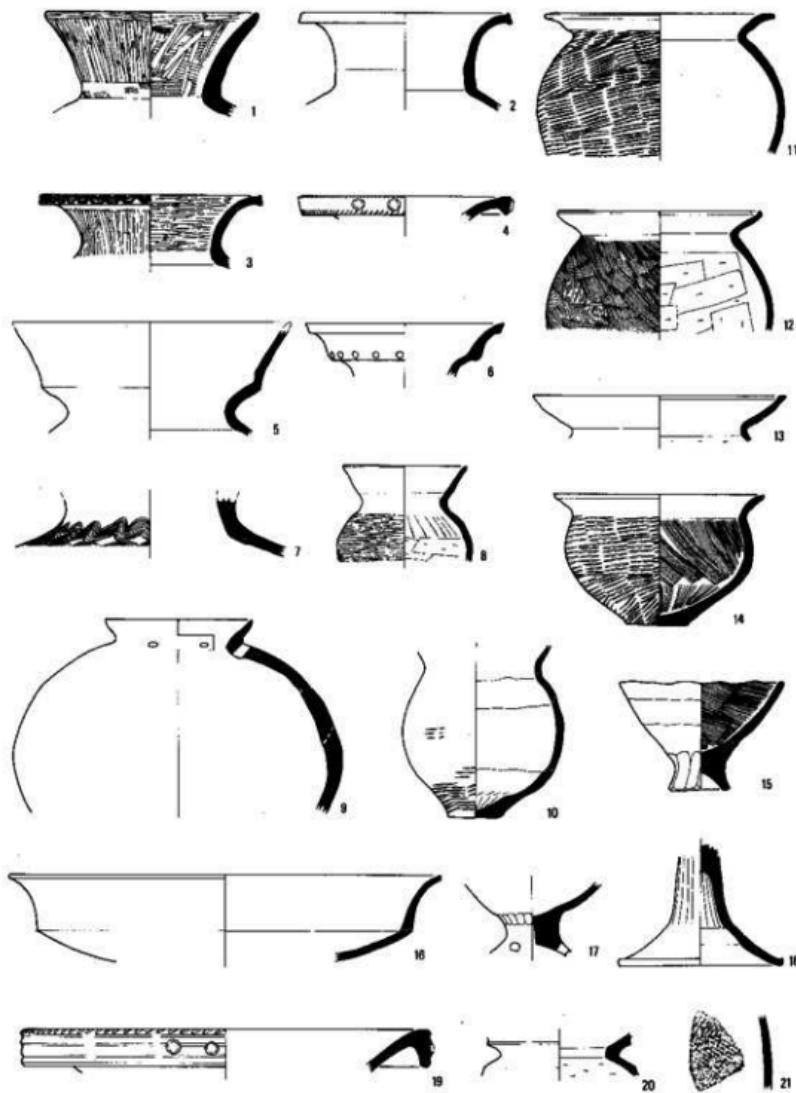
SB11 後の搅乱で中央の柱穴を欠くが、南北推定2間(3.8m)の柱列で、東西棟建物の東妻柱列と考える。建物方位が北で東に振れている。

SE12 東西1.7m、南北1.8mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ2.1m。井戸枠は各一枚の堅板を、隅柱なしの横桟のみで支持する構造で、内法一辺45cmである。枠内からは奈良時代末から平安時代初頭にかけての土器少量と、軒平瓦(平城宮6663C型式)1点、土馬2点が出土している。

III 出土遺物

SD01から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての比較的良好な土器が出土しているので、これらについて記述しておきたい。





0 20 cm

SD01出土土器 1/4

主要なものは、壺形土器（1～10）、壺形土器（11～13・21）、鉢形土器（14・15）、高杯形土器（16～18）、器台形土器（19・20）である。

壺形土器 1～4は広口壺である。1は口頸部が直線的に外傾する直口の壺である。口頸部内面に一部ハケメが残るもの、丁寧に外面を磨いている。2～4は口頸部を大きく外反させ、さらに口縁端部を上下に肥厚させるものである。2は口縁部および口頸部内外面をヨコナデ調整、口頸部下半から肩部にかけてを、タテ方向にナデ調整する。3は口縁部に波状文を施し、口頸部内外面を丁寧に磨く。4は口縁部に刺突文および円形浮文を施す。小片のため判然とはしないが、器台の可能性もある。5・6は複合口縁壺である。5は磨耗が著しく調整は不明。肥土中に多量の細砂を含む。6は口縁端部を肥厚させ、さらに口縁部下半に小竹箒文を巡らす。7は頸部から肩部にかけての破片である。外面を波状文で飾る。内面はナデ調整。8は小型丸底壺である。口縁部内外面はヨコナデで調整し、体部外面はヨコ方向に磨くが、部分的にハケメが残る。体部内面はヨコ方向のヘラケズリ。9は球形の体部に短く外傾する口縁部を付けた壺である。体部上方に二孔が穿たれている。器壁が厚く、胎土も淡褐色を呈する他のものとは異なり、赤褐色で緻密である。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整する。10は小型の短頸壺と考えられる。体部外面はヘラミガキするが成形時のタタキ目を残し、内面はハケメ調整するが粘土紐の巻き目が残る。

壺形土器 11は外反する口縁部をもち、体部外面を右上がりのタタキで成形する。内面はナデ調整。12は口縁端部をやや上方から内側へつまみ上げたもので、体部外面は細かいハケメ調整、内面はヘラケズリする。13は口縁端部を内側に肥厚させたもので、内面は頸部直下からヘラケズリする。21は体部の小破片で、外面には矢羽根状のタタキ目が残る。

鉢形土器 14は半球形の体部に外反する口縁部が付くもので、口縁径は体部最大径および器高を上まわる。体部外面には水平および右上がりのタタキ目が、内面にはハケメが残る。15はあげ底の底部と内鶯気味に広がる体部とをもち、体部外面はナデ調整、内面はハケメ調整する。

高杯形土器 16は杯部、18は脚部の破片である。16は大きく外反する口縁部をもつもので、杯部内面はハケメ調整のちヘラミガキ、外面もヘラミガキで調整する。17は楕円の杯部をもつもので、脚部は三方透しを入れる。胎土はくさり疊を含み、赤色を呈する。18は円錐形に広がる脚部で、外面はヘラミガキ、内面はヨコナデで調整する。

器台形土器 19は口縁部が下方に肥厚しており、この部分に擬凹線と刻み目とを巡らせ、円形浮文を貼り付ける。胎土は角閃石を含み、暗茶褐色を呈する。20は鼓形器台と考えられる。脚部内面をヨコ方向に削る。胎土はくさり疊を含み、明赤褐色を呈する。

なお、特に胎土、色調の説明がないものは、いずれも長石、石英、霰母を含み、淡褐色を呈している。

(I・II: 中井 公、III: 花谷めぐむ)

その他の調査

平城京八条大路の調査（104次） 奈良市東九条町において実施した、奈良市農業協同組合事務所建設に伴なう事前発掘調査である。平城京条坊復元では、八条大路と東三坊坊間路との交差部南側に相当する。このため八条大路南側溝想定位置に150 m²の発掘区を設定し調査を行なった。発掘区内の土層堆積状態は、北側約0.4m、南側で約0.9mの盛土がなされ、以下、旧耕土、床土と続き旧耕土下約0.3mで漆黒色砂土の地山となる。地山上面では、近世の土壤を数箇所検出したが、発掘区北半分は自然河川跡及び旧灌漑用水路のため削平されており、奈良時代の遺構は何ら検出できなかった。

（二好美穂）

平城京右京八条二坊一坪の調査（90次） 奈良市七条町において実施した鈴佐伯建設届出のマンション建設に伴なう事前発掘調査である。平城京条坊復元では、調査地の北辺部に七条大路の存在が想定される。このため想定位置に480 m²の発掘区を設定し、調査を行なった。発掘区内の土層堆積状態は、現地表から約1.2mまでが造成による盛上で、以下に旧耕土、床土があり、その下に近世の遺物包層である淡茶褐色砂が堆積する。この近世遺物包含層上面で土塙2箇所を確認したが、遺物はなく時期は不明。またこの面から更に約1mまで掘り下げたが、以下は青灰色砂土の堆積が続き、遺構は確認できなかった。調査地の西側を流れる秋篠川の氾濫原となっていた可能性が考えられる。

（三好美穂）

平城京左京三条三坊十二坪の調査（95次） 奈良市大宮町において実施した㈱カヤノキ建設届出の共同住宅建設に伴なう事前発掘調査である。発掘区内の土層堆積状態は現地表から約1.4mまでが造成盛土で、以下旧耕土、淡青灰色粘土、淡青灰色粗砂と続き、旧耕土下約1mで地山の黄褐色粘土となる。発掘区東端では、淡青灰色粗砂の下にさらに灰色細砂が堆積し、地山に至る。淡青灰色細砂及び、灰色細砂層はいずれも、調査地の西を流れる佐保川の旧流路と考えられる。また、黄褐色粘土層上面で一辺約1mの柱穴を1個検出したが、他には組合う柱穴はなかった。出土遺物はなく時期不明。

（森下恵介）

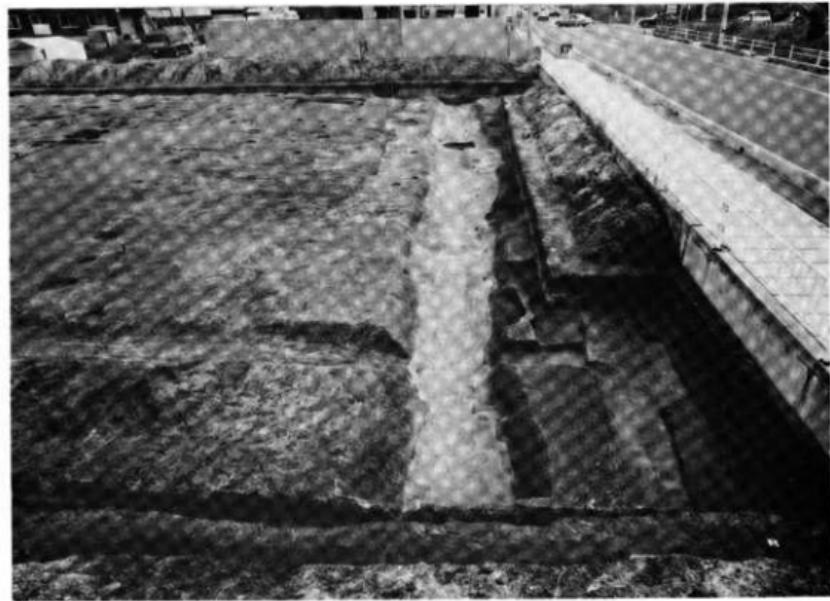
平城京左京三条四坊八坪の調査（105次） 奈良市芝辻町において実施した内田素康・西田辰氏届出のマンション建設に伴なう事前発掘調査である。平城京条坊復元では、調査地北辺部に二条大路南側溝の存在が想定される。このため想定位置に440 m²の発掘区を設定し調査を行なった。発掘区内の土層堆積状態は、上層から盛土、旧耕土となり、以下約1.5mまで灰褐色砂礫、粘土の互層堆積が続く。この上面で近現代の灌漑用井戸を一基検出したが、他に遺構はない。さらに、奈良時代の遺構面の確認のため、発掘区北辺を掘り下げたが、近世土器を含む灰色礫層が深さ3m以上にわたり続いていること、奈良時代遺構面は確認できなかった。調査地周辺の地形にみられる水田畦畔の乱れをあわせてみて、当該地は佐保川旧流路上に位置しているものと考えられる。

（篠原豊一）

図 版



1. 発掘区全景（北東から）



2. SD01 (北から)



3. SB04 (東から)

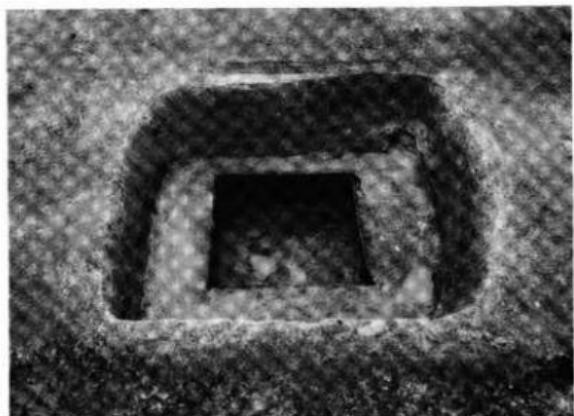


4. SB05 (西から)

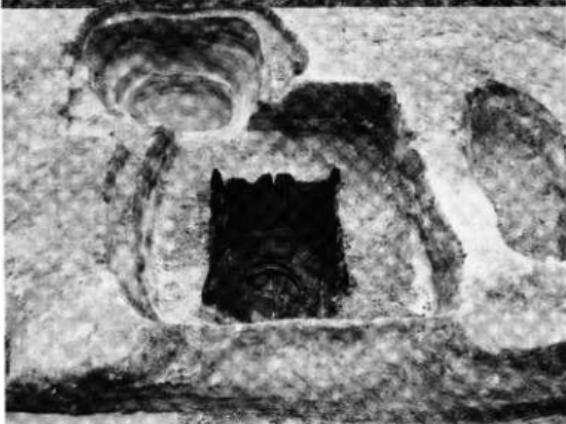


5. SB08 (北から)

6. SE10 (北から)

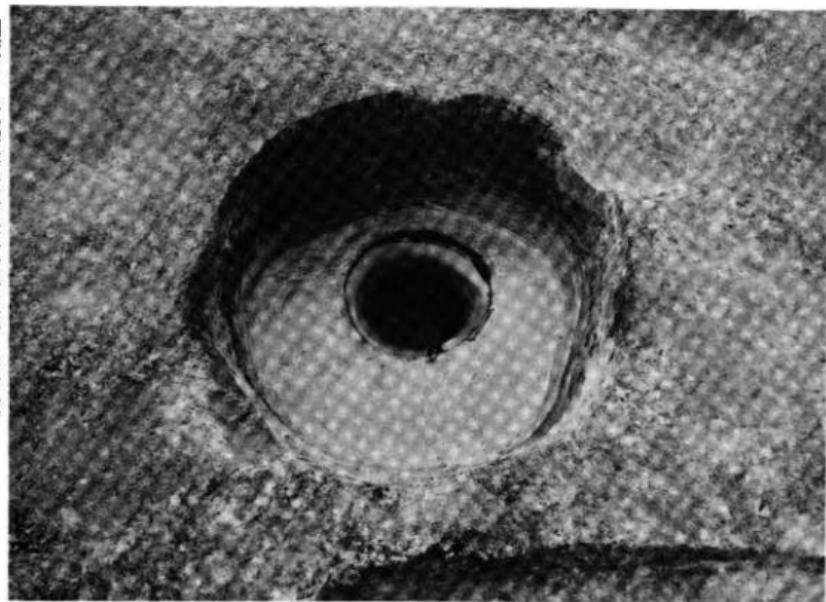


7. SE12 (北から)

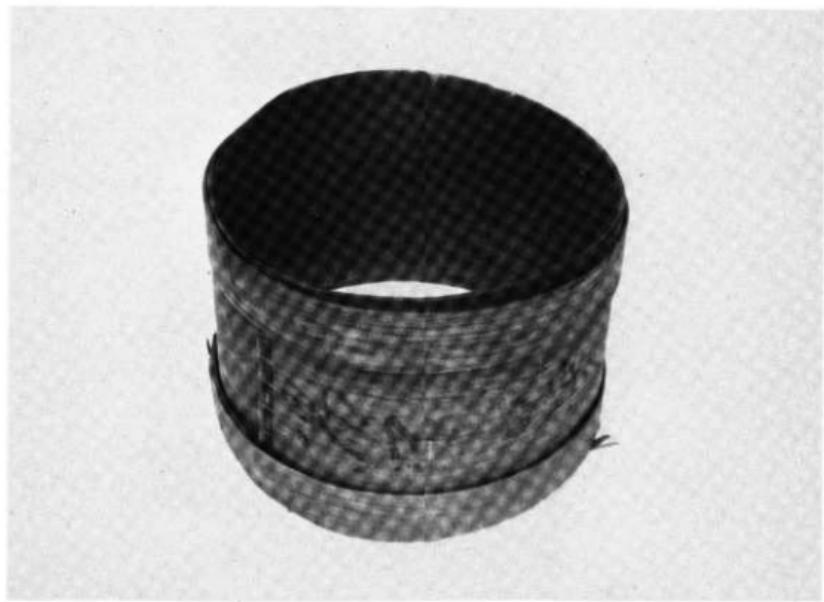


8. SE13 (東から)





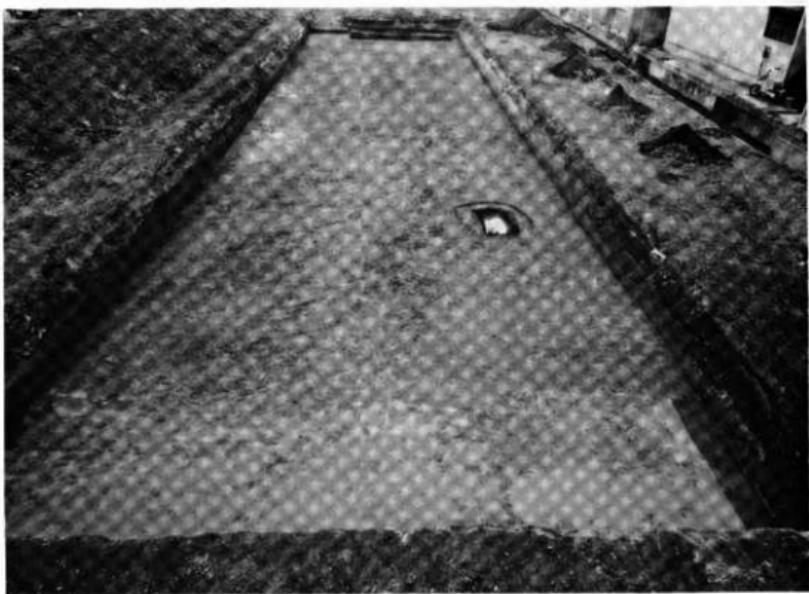
9. SE11 (北から)



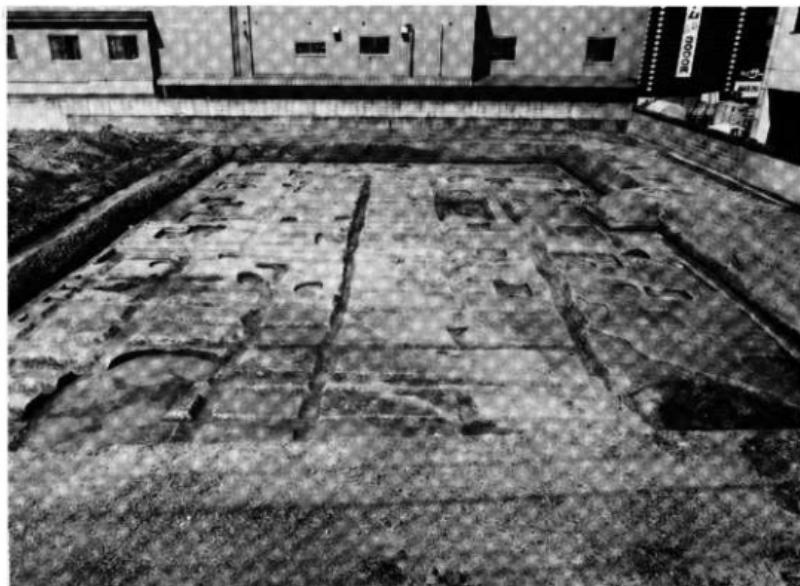
10. SE11 墨書き曲物



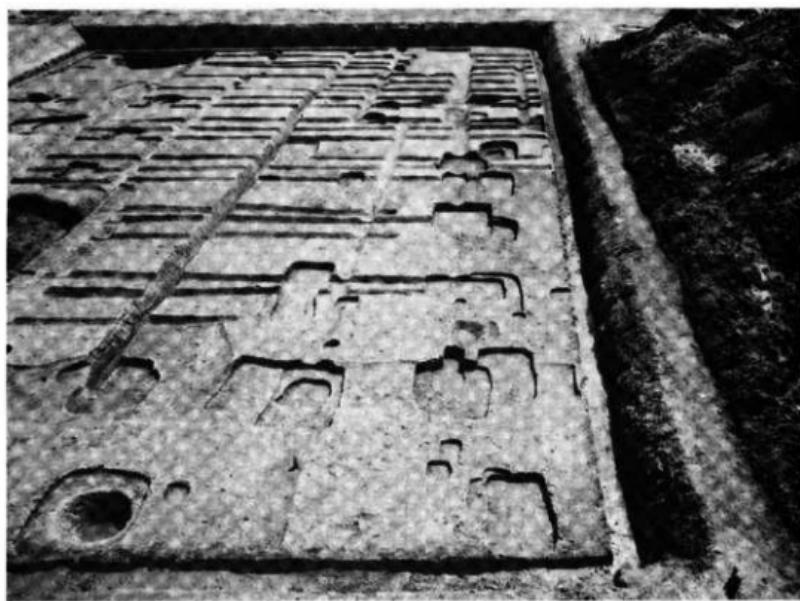
I. 左京二条七坊八坪発掘区全景（南から）



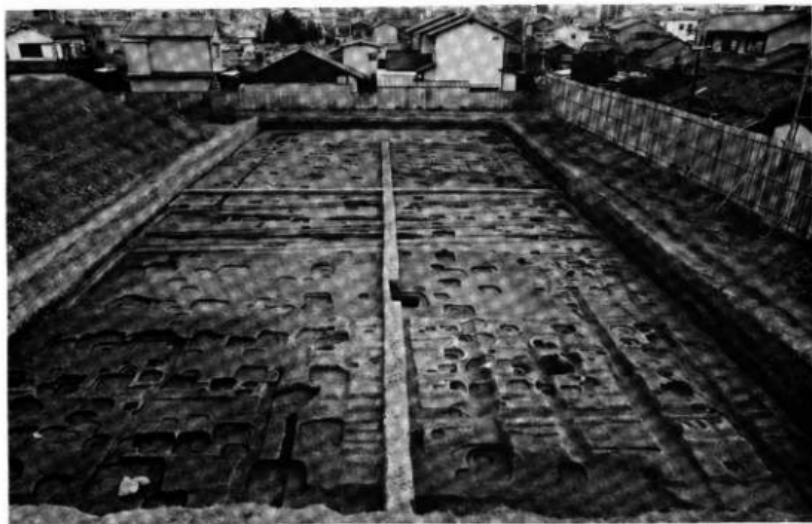
I. 左京三条四坊八坪発掘区全景（南から）



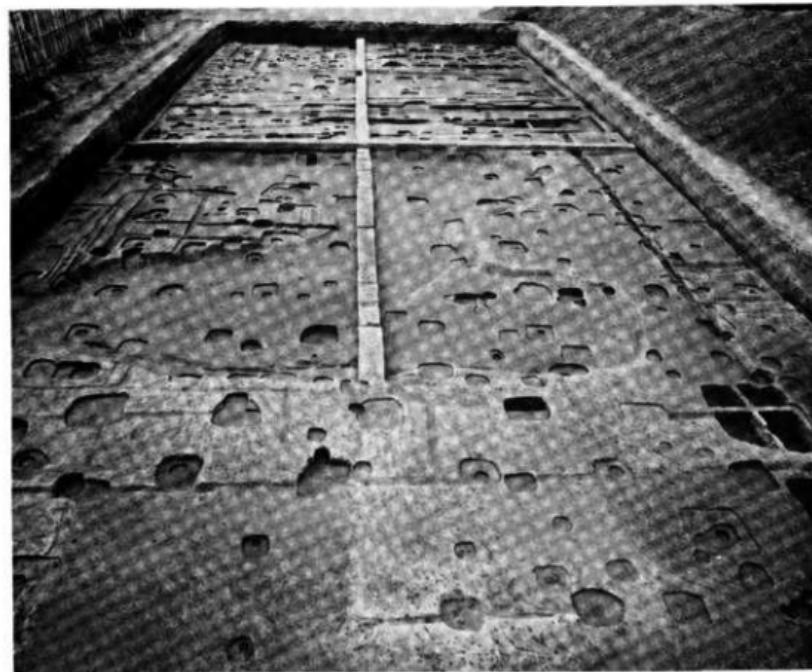
1. 発掘区全景（南から）



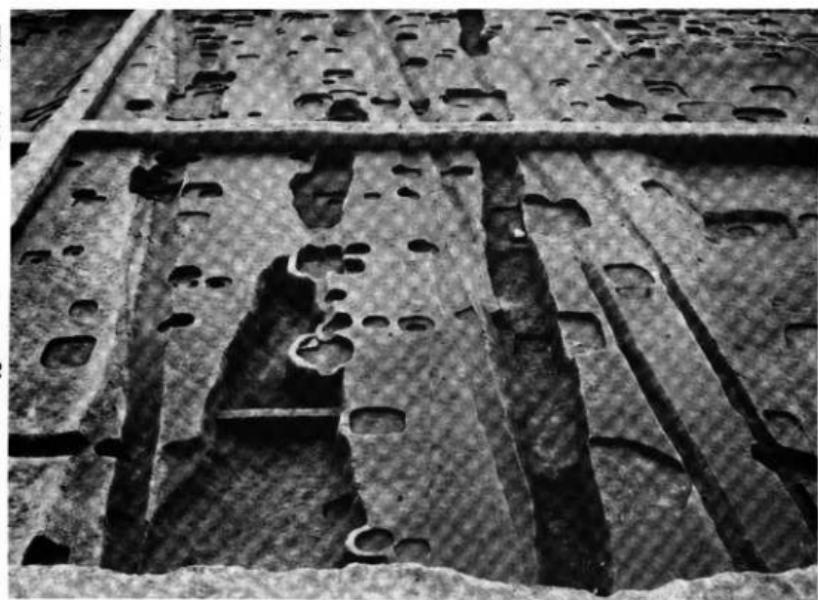
2. SB01・02（北から）



1. 発掘区全景（西から）



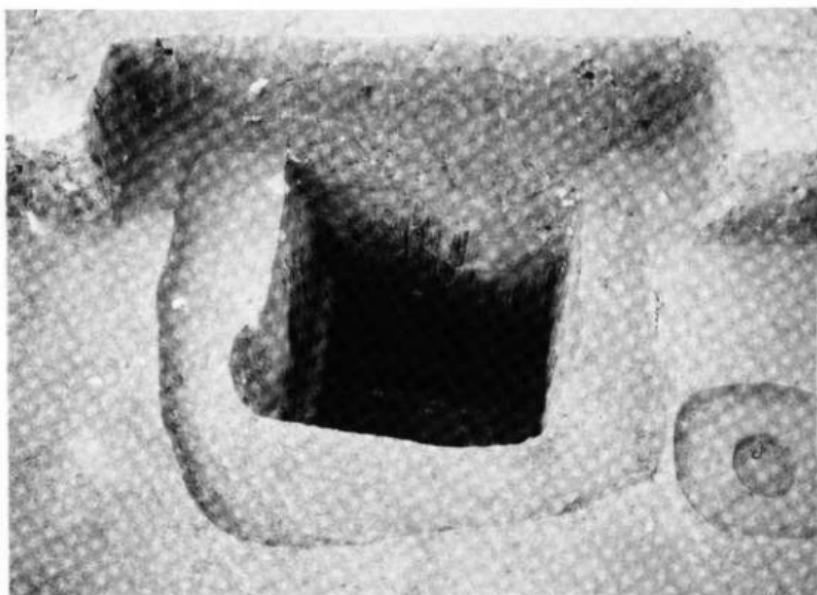
2. 発掘区全景（東から）



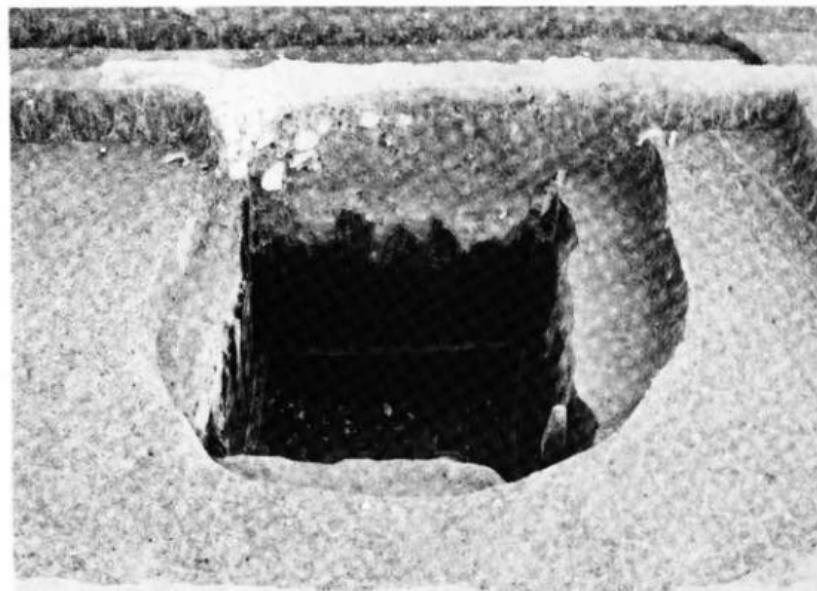
3. SF01 (北から)



4. SB05・06・07 (西から)



5. SE19 (南から)



6. SE20 (北から)



1. 第2遺構面全景（東から）



2. 同東側部（南から）



3. 同西側部（南から）



5. 同東側部(南から)



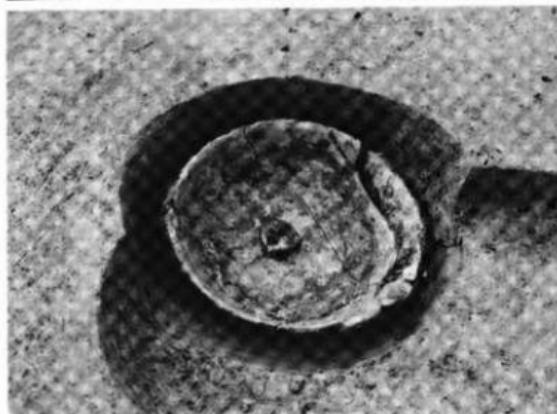
6. 同西側部(南から)



1. 発掘区全景（北から）

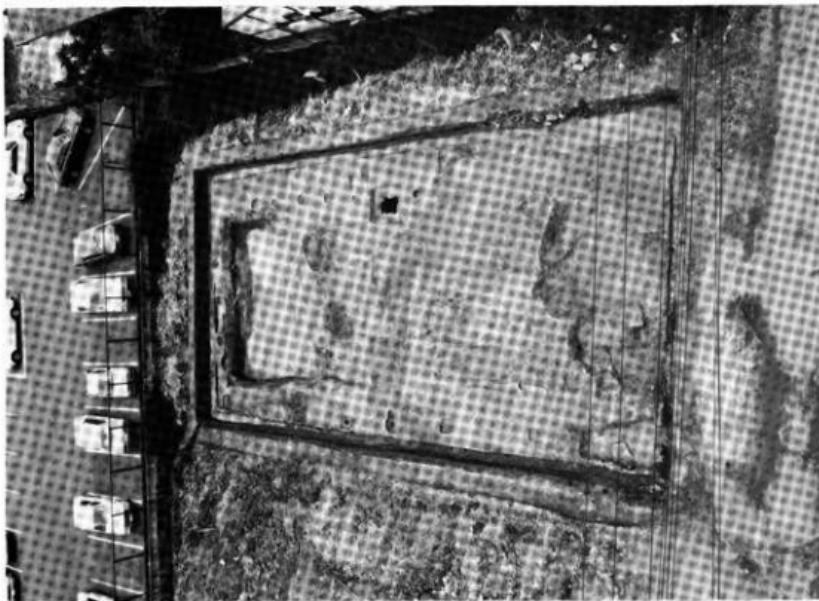


2. SD01・SD02（東から）

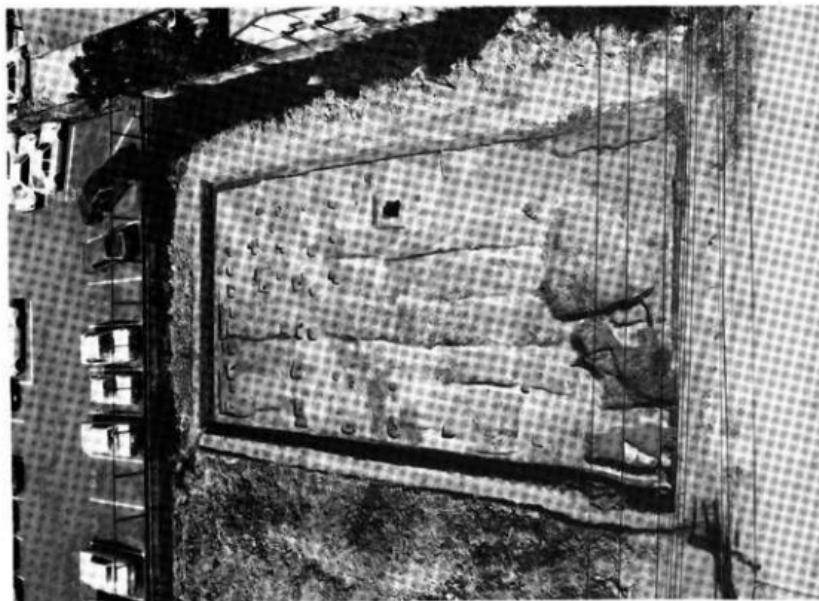


3. SX14（東から）

図版 13 平城京左京(外京) 四条五坊四坪 第88次



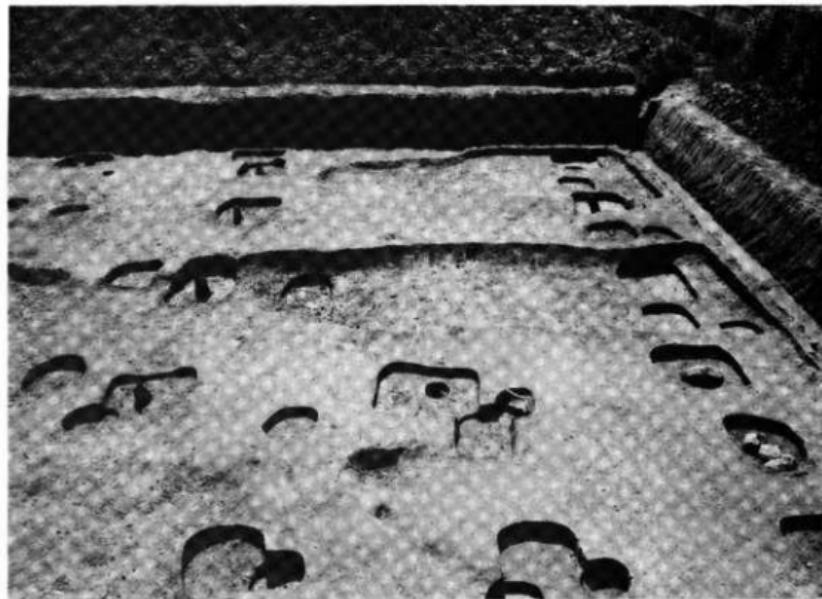
1. 発掘区全景(南から)



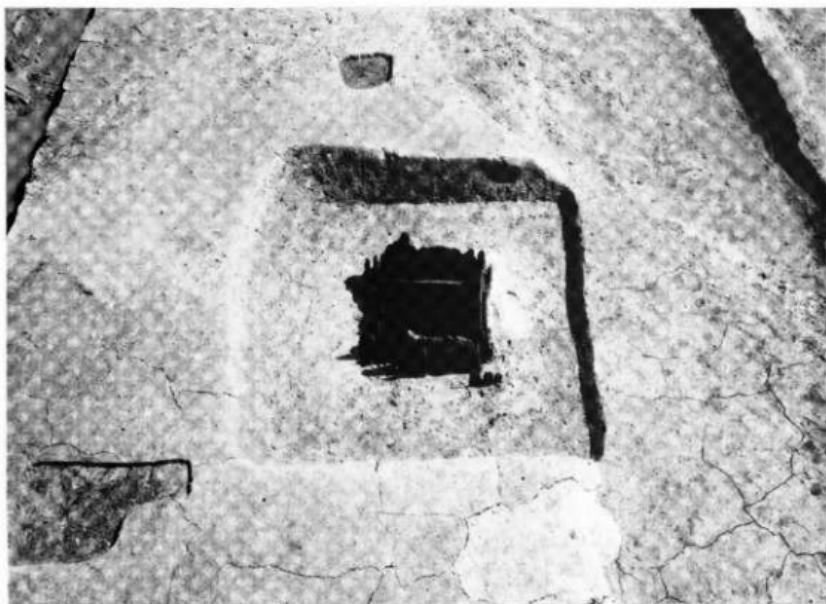
2. SD01完掘後発掘区全景(南から)



3. SB05 (南から)



4. SB04 (東から)



5. SE12 (北から)



6. SD01 (西から)

奈良女子大学附属図書館

奈良市埋蔵文化財調査概要報告
昭和60年度

昭和62年2月2日 印刷
昭和62年2月6日 発行

編集 奈良市教育委員会
(奈良市二条大路南一丁目1-1)

印刷 共同精版印刷株式会社
(奈良市三条大路二丁目2-6)